

鳩間方言の祭祀関係語彙 (1)

加治工, 真市

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

56

(終了ページ / End Page)

104

(発行年 / Year)

1992-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012611>

鳩間方言の祭祀関係語彙(1)

沖縄県立芸術大学 加治工 真 市

アイザムトゥ [ʔaidzamutu] (名)「出合い場の元」の義か。豊年祭の時、西村と東村の旗頭が出合い、合流する所、交差点。西村と東村の境界線となる縦道と沿岸道路の横道が交差する所。そこは、ピナイウガン [pi-naiugan] (鬚川御嶽)とツサンキ [sanʃiki] (棧敷)を画する縦道と沿岸道路の交差点でもある。友利御嶽から朝の祈願を終えて道歌を歌って降りて来られるサカサとティジリビたちを、サンシキ (棧敷)に待期していたヤクサ [jakusa] やスーダイ [su:dai] (総代)らが恭しく迎えて、サンシキの歌を歌い終える。それを合図に、アイザムトゥでは、ドゥラーン [dura:n] (銅鑼)が一段と強く打ち鳴らされ、東西の旗頭が合流し、東を先頭にして、棧敷に入る。パーレーが済んで、旗頭がトゥニムトゥへ帰る際には、このアイザムトゥで「アイザムトゥ」の歌を歌い、来年の豊年予祝の祈願をして別れる儀式を行なう場所である。

アカカラジ [ʔakakaradʒi] (名)、民百姓、一般百姓の意。日常会話では用いられず、祭祀の場で、カンフチ [kanʔɯtʃi] (祈願の文句、呪禱文)、ニガイフチ [nigaiʔɯtʃi] (祈願の文句、呪禱文)の中で用いられる。アマングイ [ʔamangui] (雨乞い歌)のハヤミク [hajamiku] (早め句)の中に、

ウマンチュヌ ニガイヤヨー

アカカラジ・ヌ ニガイヤヨー

ハーリアミタボーリ リューガナシ とある。

アカティダ [ʔagatida] (名)「真赤な太陽」の義。灼熱の太陽の意。人間にとってマイナスの方向に働く太陽の意。例、アガティダナ プサリ パタキ カイツンティ アークンケン フカイ ナーヌ [ʔagatidana pʊsari pʌtaki kaisunti ʔa:kʊŋken ʔɯkai na:nu] (灼熱の太陽の下で陽にほされて畑を耕そうとしているうちに体温が異状に上昇してきてしまった)。

アガムノーマ [ʔagamuno:ma] (名)「赤い小さなもの」の義。「火」のこと。ツサレーのとき、「火」ということを直接に言葉で表現することは、タブーとされている。「赤いもの」と言うことによって、「火」を表すようになっていく。神の言葉として、「火」を直接に、ツピー [pi:] (火)というとき、火事が起きると信じられていたので、それを避けて、アガムノーマ (赤い小さなもの)と婉曲に表現したのである。

アギゾー [ʔagidzo:] (名)「上げゾー」の義か。「あげる」とは、「終了」の意である。祈願

に供えたものの一部を、神の苞として別にとっておくものの意であろう。祈願が済んで、ウツァナクの上のカヌク、ムリクバンの上のクバンとアライパナひと掴み程度を包んでおく紙のこと。「上げ重」の意か。アギゾーに用いる白紙は、ほぼ10センチ正方形の大きさである。アギゾーヤ⁷ トゥリシキ [ʔagido:ja turifʃiki] (アギゾーは取っておきなさい)

アサ⁷カイ [ʔasakai] (名)「朝粥」の義。アチ⁷ビカイ [ʔatʃibi-kai] (少し軟かめの粥。普通の御飯と、ゾロゾロ粥の中間の粥)にして、ラッ⁷キョー [rakko:] (ラッキョウ)、シームヌ [ʃi:munu] (「汲い物」の義。汁のこと)を添えて供えた。お盆の朝食として決まっているメニューである。例、アサ⁷カイ バカシ⁷ シキリ⁷バ [ʔasakai bakafʃikiriba] (朝粥を炊いて供えなさいよ)

ア⁷シ [ʔaʃi] (名)「朝飯」の義か。昼食のことである。朝食のことを、アサ⁷ボン [ʔasabon] (「アサ・ウバニ」の転か)ともいう。古い時代には、ア⁷シ (朝飯)が朝食を意味し、従って一日二食の時代であったと考えられるが、後に、アサ⁷ボン「朝飯」が、新しく朝食の意に用いられるに及んで、ア⁷シ (朝食)は、昼食の意へとおしやられ、意味変化し、一日三食の時代へと移っていったものと考えられる。

アマイオー⁷ルン [ʔamaio:ruŋ] (動)「飲えおはる」の義か。神女 (サカサ) や神人 (ティジリビ) たちが、祭祀の後、一定の所で酒肴を用意して飲食を共にし、神歌を歌い、またその練習をすること。戦前までは神役 (サカサ、ティジリビ) を継ぐ際にも、サカサやティジリビの家に集まって神歌の練習をしたという。ユニガイの後などは、サカサ、ティジリビたちが、それぞれの家を回り、飲食しながら神歌の練習をする習慣があって、1955年頃まで、それが続けられていた。

例、カン⁷ブンケーヤ ムカ⁷シェー キチゴン、ユニガイヌ⁷ アトー⁷ ウマ カマー⁷ ナユライ オー⁷リ イッケナ⁷ アマイオー⁷ツタン ダー [kampusugke:ja mukafes:kitʃigog ju:nigainu ʔato: ʔuma kama:na jurai ʔori ʔikkenə ʔamaio:ttan da:]

(神人<<神役の人>>たちは、昔は、結願祭や世願い祭の後には、あちこちにお集りになって、たいそう神遊びをして飲えられたよ)。

アライパナ [ʔarai-pana] (名) (洗い花米)の義か。神事に用いる花米で、水洗いしたもの。豊年祭や、ソーニヨイ [so:ni-joi] (13、25、61、73、85歳などの生年祝。誕生祝)などの神への祈願の際に用いる花米。2、3時間、水に漬けた後、水切りしたもの。

例、アライパナー⁷ サバンナ イリティ⁷ シメーマ⁷ ムロー⁷リバ [ʔaraipana:saban-na ʔiriti ʔmme:ma muro:ri-ba] (洗い花米は茶碗に入れて、少し盛って下さい)

アラ⁷カー・ウガン [ʔaraka:ʔugaŋ] (名) アラカー御願。ウブ⁷マイ [ʔubumai] (中岡の西南、パカヤマ [pakajama] <<墓山>>との境)にある。ヤラブやフクンの巨樹が鬱蒼と生い茂る中に瓦葺きの拝殿がある。拝殿の奥の方に⁷ウボー [ʔubo:]がある。普通はミジム

トゥ [midzĩmutu] (水源) ^{ミジムトウ} といわれ、水の神を祭ってあるといわれている。アザテー [ʔadzate:] (東里家) とヨーカヤ [jo:kaja:] (西原家) の人々が信仰している。伝承によると、ヨーカヤーとアザテーの先祖がこのお嶽を信仰していたが、ある時の旱魃に、同家の畑の上にだけ降雨のあったことから、村の人々も信仰するようになったという。アザテーはヨーカヤーの分家である。ヨーカヤーの屋敷の東庭は大変セジ高い所で、鳩間方言では、カンダカール [kandakarũ] (神霊の高いこと) 所といわれている。昔は、ウイヌフウガンで祈願のあった後、サカサ (司) やカンプス (ティジリビ) たちは、カンヌ・ミチ [kannu-mitʃi] (神の道) を通ってヨーカヤーの東庭のビチルの所に集まり、カンアサビ [kan-asabi] (神遊び) をしてアマイオーツタ [ʔmaio:ttã] (飲えなされた) といわれている。農耕の神として同家で祭られている。豊年祭の西村のカシラ [kaʃira] (旗頭) はトゥニムトゥ [tunimutu] (「根元」の義。東里家) で祭られ、保管されている。東里家から分与されたのが東村のトゥニムトゥ [tunimutu] 家といわれる、友利家 (トゥムレー [tumure:]) で祭られている、アンヌ・ムラ [ʔannu-mura] (東村) のカシラ [kaʃira] (旗頭) で、代々同家でそれを祭り、保管している。これらはミジムトゥ [midzĩmutu] ^{ミジムトウ} 信仰と関連しているといわれている。カシラも西村のそれは女性を象徴し、東村のそれは男性を象徴している。

アラシ・コーシ [ʔarãʃi-ko:ʃi] (名) 「蒸し菓子」の義。糯米を約6時間、水に漬けてふやかし、一旦とり出し、水きりをして搗き臼に入れて杵で搗き、粉にする。これを、クー・バリ [ku:bari] (「粉割り」の義か) という。製粉することである。この粉に黒糖 (ツフ・サタ [ffu-sata]) を薄く削ったものを混ぜ、よく揉んでアラシ・パク [ʔarãʃi-pãku] (蒸し箱) に入れて蒸しあげて作った菓子。四角の食パンの大きさに切って食した。美味であった。昭和40年頃まで作っていた。特別な行事の際に作った。

アンガマ [ʔãggama] (名) 「姉さん」の義か。お盆の中日と送りの日に、獅子舞いに伴って踊る、一団の仮面仮装集団。木の葉で仮面を作り、タオルを頬かぶりにし、クバの葉扇を持った翁と媼を先頭にして、変装した青年男女が続いて踊る。男女とも頬かぶりして、クバ笠を深く被り、男は女装、女は男装して、うら声をつかいながら地謡を回り、ヒヤリクヨイサー サーサーと言って踊る。踊りを催促して踊ったりする。

イーパイ [ʔi:pai] (名) 位牌。先祖伝来の位牌は、ウブ・イーパイ [ʔubu-i:pai] (「大きな位牌」の義) といい、上下二段に分かれた、先祖の個人の木牌を奇数枚横列に並べて安置する木製の枠組になった位牌のことをいう。黒塗りの枠組に、朱塗りの木牌が嵌めこんであるが、巾約2センチ、長さ約10センチの木牌の正中には通常、「帰真霊位と」金粉のエナメルで書き、裏面に氏名と享年が墨書されている。イーパイを安置する所を、トゥクニ [tykuni] (仏壇) という。これは必ず二番座に設えられる。又個人用の小さな位牌を、イーパイヤーマ [ʔi:paija:ma] (小さな位牌) という。葬式のときに作られるものを、

スイーパイ [ssui:pai] (白位牌) という。例、ヤームトウヤナー ウブ・イーパイ
ヌ アツタン [ja:mutu-ja:na: ʔubu-i:painu ʔattag] (本家には、大位牌があった)。大
位牌をグワンス [gwansu] (元祖) ともいう。

イキロー [ʔikiro:] (名) 「^{いまりよう}生霊」の義か。現代では、原義で用いられることは少なく、卑
罵語として用いられているのが普通である。対人に、または話題の人物の行為、性質、状
態をののしる際にいう。例、ウンザーイキローヌ カタチニ ブー [ʔundza:
ʔikiro:nu kətatʃini bu:] (あいつはイキローの ようになっている)。イキロー マー
シノ [ʔikiro: ma:ʃino] (イキロー 野郎めが)

イチバンヤク [ʔitʃiban-jaku] (名) 「一番權」の義。パーレー [pa:re:] (爬竜船) を漕ぐ際、
触先の方に乗って漕ぐ人、一番漕ぎ手のこと。この人の漕ぐペースに合わせて、リズムを
取りながら漕ぐ。また、イチバン・ヤクは、折り返し点のブイを回るとき、触先から權を
外側へ出し、進行方向と逆の方向に力強く漕ぎ回すと船の旋回が早くなる。パーレーヤ
イチバンヤクナール カカル [pa:re:ja ʔitʃiban-jakuna:ru kəkaru] (爬竜船は一番漕
ぎ手の力量にかかっている)。

イツァカウ [ʔitsa-kau] (名) 「板香」の義。巾約1.2センチ、長さ約15センチ、厚さ約
1.5ミリの板状の線香。1枚が約6本の線香になるよう、縦に溝が掘ってあり、正式の祈
願の際、3枚、5枚、7枚の板香を楚いて、コーロに立てる。神事祭祀では、このイツァ
カウ (板香) を用いるのが一般である。例、イツァカウ プスムトウ シキ タ
ティリ [ʔitsakau pʊsumutu ʃiki tətiri] (板香一本、火をつけて立てなさい)

イツァンパイ・キー [ʔitsampai-ki:] (名) ヒサカキの一種か「まさき」のこと。葉はゲッ
キツに似る。各家の庭木や、生垣用に植えてある。ニンガイ・キー [niggaiki:] (「願い
木」の義、神行事や仏事の祭、神前、仏前に活けて供える樹木) とも言われる。例、イ
ツァンパイ・キーヌ パーカカイキーティ パナングミナ ッシバ [ʔitsam-paiki:
nu pa: kəkai:ti pananggumi-na ʃʃiba] (イツァンパイ木の葉をもちてきて、祈願用
の花米に差しなさいよ)

イリクヌティー [ʔirikunu-ti:] (名)。お盆の獅子舞いの時、吹奏される笛の曲名。獅子
元の家から各家へ回る際に、神歌として笛だけで二度吹奏される。「入子の笛」の義であ
ろう。アンガ踊りが若衆たちによって踊られ、祖霊を慰め回ることから、念仏歌と共に
渡来した芸能であることが推定される。この笛の音によって、次に回る家の人に獅子舞い
の迎え入れの準備をさせたものである。

イン [ʔiŋ] (名) ^{いす}戌。十二支の第十一番目。インディ・マリ [ʔindi-mari] (戌年生れ)。
インディ・プス [ʔindi-pʊsu] (戌年生れの人)。例、インディ・プソー ヨー イン
ヌ・バタティ アザリティ イッケナバタツファー ツォー [ʔindi-
pʊso: jo: ʔinnu-batati ʔadzari:ti ʔikkenā bataffa:n tso:] (戌年生れの人にはねえ、「犬

の腸」と言われて、非常に腹暗い《立腹しやすい》そうだ。犬は腸が短いので、よく吠えるといわれている)。

インク・ニガイ [ʔiŋku-nigai] (名)「隠居願」の義。神役を退くために、ヲヤマヤマ [jamajama] (御嶽御嶽)の神に祈願する祭祀儀礼。老齢と健康上の理由により、隠居願の祈願を、村を通じて行なう。それによって後任の神役が生まれるという。在任中に後任の話をすすめると、カントウンヲガー [kantugga:] (神よりの罰)が与えられるという。ヲトゥシン トゥリヲオーリバ インクニガイ ソーラバナル ナル [tuŋin turio:riba ʔiŋkunigai so:rabaru naru] (お年もめしておられるので、隠居願いをしなければならぬ《すればぞなる》)。

インビキ [ʔimbiki] (名)「縁引き」の義か。地縁的關係を示すもので、何かの縁で、例えば祝儀などのやりとりをする関係をさすといわれている。嫁のやりとりをするとき、嫁の里方との間に成り立つ関係などをいう。例、インビキティ スモー アズヲカー ブネーカタトゥヌヲ ピキドゥヲ ナリ ブーヲ ミー [ʔimbikiti sumo: ʔadzuka: bune:katanu pi:kidu nari bu: mi:] (インビキというのは、言うなれば母方とのピキに相当しているんでしょね)

ウイヌヲ・ウガン [ʔuinu-ugag] (名)「上のお願」の儀、友利御嶽のこと。『沖縄文化財調査報告書第70集』(沖縄県教育委員会)に、次のように記述されている。「トゥムリウガン。異称 ウイヌヲウガン、『琉球国由来記』記載の名称 友利御嶽、所在地 字鳩間福堂。祭神 神名 ヲトモリ 御イベ名 大ザナルガネ。由来 由来不_二相知_一 (『琉球国由来記』)。鳩間島では最も古い御嶽である。鳩間を建てたという英雄義左真主が創建した御嶽であるといわれている。各御嶽の中で最高位にランクされ、他のすべての御嶽の〈神〉の存在する場所であると考えられている。トゥムリウガンには、他の御嶽の香炉が置かれており、祭祀や儀礼もここでのみ行なわれるものが多い。トゥムリウガンで祈願することは、他のすべての御嶽での祈願に相当する行為であると考えられている」。

ムトゥヲウガン [mutuugag] (元お嶽)ともいう。歌謡語では、トゥムル [tumuru] (友利〈お願〉)と歌われている。鳩間島の「お願」の中心となる所で、^{ナカンブレ}中岡の東側の森の中にある。フクン [Φ ykuŋ] (福木)やガジヲマル [gadʒimaru] (榕樹)、マーヲニ [ma:ni] (黒桫椰子)、クバ [kuba] (びろう、蒲葵)、その他雑木が密生して昼でも薄暗い。神域は石垣を二重三重に積みめぐらしてある。中心部の所にヲウポー [ʔubo:] (「威部」の義か)があり、そこへ通ずる道の入り口にパイヲディン [paidiŋ] (「拜殿」の意か。小屋根付きの門)がある。そこにはコーヲロ [ko:ro] (香炉)が据えてあり、男性はそこから内へは入れない所といわれている。どうしても必要があって、そこから内部へ男性が入る際は神に祈願をしてから入るが、その際の条件は、マラタリヲムヌ [maratarimunu] (魔羅たれ者)、アティナシヲムヌ [ʔatinaʃimunu] (無分別者)としてであった。従って

男性は禪を外して、ぶらぶらさせながら入らねばならなかったという。拝殿の北側には、メー [me:] (庭) と呼ばれる空間があり、そこでキチゴン [kɪtʃigɔŋ] (結願祭) のブドゥル [buduru] (踊り) やキョ^ンギン [kjoŋgin] (狂言、劇) などの余興が行なわれた。庭の北側にはウブ^アヤー [ʔubuja:] があり、ユ^ングマ^ル [ju:ŋgumaru] (夜籠り) をして祈願する所である。そこには神棚が設えられていて、コーロ (香炉) が置かれている。そして南側に小窓が開いていて、ウポーへのお通しの祈願ができるようになっている。庭でバンコを設えて舞台とし、ウポーの方向に向いて奉納芸が演ぜられる。その際、ウブヤーが楽屋の機能をはたす。部落民はメー (庭) の東と西に、それぞれ東村の人、西村の人が棧敷を作って座り、上演される奉能芸能を観劇したものである。

- ウ^ウー** [ʔu:] (名) 卯。十二支の第四番目。ウ^ウディ・プ^ス [ʔudi-pɯsu] (卯年生れの人)。ウ^ウディ・マリ [ʔu:di-mari] (卯年生れ)。例、ウ^ウディ・プ^ソー チャ^ー ウ^ウサ^リ・ハ^ーウ^ウサ^リ シ^エウ^ウティ ア^ーウ^ウク^ンダ^ー ム^ンド^ーウ^ウヤ ナ^ーウ^ウヌ [ʔudi-pɯso: tʃa: me: ʔu:sariha:sari fɛti ʔa:kunda mundo:ja na:nu] (卯年生まれの方は、いつも、はいはいとって、頭を低くしているから、喧嘩は起こらない)
- ウ^ウガン** [ʔugan] (名) 「おがみ」の義か。「お願所」のこと。お嶽。鳩間島では、ウタキとは言わない。必ずウ^ウガンという。ム^トウ^ウ・ウ^ウガン [mutu-ugan] (「^{モト}本お願所」の義。友利お嶽のこと。単に ム^トウ^ウともいう。歌謡では、ト^ムムル [tumuru] と歌われている)、ピ^ナイ^ウ・ウ^ウガン [pinai-ugan] (ピ^ナイお嶽)、ア^ラウ^ウカ^ー・ウ^ウガン [ʔaraka-ugan] (あ^らか^ーお嶽。ミ^ジム^トウ [midzimumu] ともいう)、マ^イド^ウム^ル・ウ^ウガン [maidumuru-ugan] (前^泊お嶽、タ^ビヌ^ウ・ウ^ウガン [tabinu-ugan] <旅のお願>ともいう)、ニ^シド^ー・ウ^ウガン [nifido:ugan] (西^堂お嶽)、フ^ナウ^ウバ^ル・ウ^ウガン [Φunabaru-ugan] (船^原お嶽) 等がある。『琉球國由来記』には、「友利御嶽」と「ヒ^ナイ御嶽」のフ^タヤ^マ [Φuta-jama] (二^嶽) が記載されている。
- ウ^ウク^ウジ** [ʔukudzi ʔukusuj] (籤を起こす。籤をひいて神意を占う) とか、ウ^ウク^ウジ バ^ルン [ʔukudzi barun] (籤を割る。籤を組み合わせて神意を占う) 等のように用いる。カ^ンヌ^ウ マイ^ナー ウ^ウク^ウジ バ^ロウ^ウタ [kannu maina: ʔukudzi baro:tta] (神前で御籤を割って占いなされた)
- ウ^ウクリ** [ʔukuri] (名) 「送り」の義。祖霊送りのこと。精霊会の三日間、祖霊たちを各家に迎えて孝養を尽し、供養した後、三日目の夜中に霊界へ送ることをいう。仏壇に供えたもののお初と、ム^ルム^ルのお初を籠に入れ、香炉の線香を三本抜き取って戸外に出、屋敷の西側の道に置いて拜んで送った。夜中を過ぎて、一番鶏が鳴くと、祖霊たちは帰れなくなるので、午前零時を過ぎると、早々とウ^ウクリの準備をして送った。
- ウ^ウサイ** [ʔusai] (名) 「お菜」の義か。御馳走のこと。祭祀に供える御馳走にも、酒の肴に対してもいう。ヨ^イウ^ウ ス^コール^ン [joinu ʔusai sɯko:ruŋ] (お祝いの御

馳走を作る)、サキヌ^ㄗ ウサイ ノーン ナー^ㄗヌ [səkinu ʔusai no:n na:nu] (お酒の肴になるもの、何かないか)。ウサイ^ㄗヌ ゴー^ㄗカジ ツファイミッ^ㄗタン [ʔusainu go:kadzi ffaimittaj] (御馳走の数々、あらゆるものを食べてみた)

ウサング・ソッコ [ʔusangi-sokko:] (名)「おし上げ焼香」の義か。最終回の法事で、「これでおしまい」の意をもつ。これによって祖霊は、「神」に変身すると信じられている。法事の中でも最も盛大にとり行なわれる年忌焼香。この法事を済ませると、死者は、子孫に対して、あれが不足、これが不足という、供養上の要求をしないようになるといわれている。例、ウサングソッコ^ㄗ シーオーシ^ㄗ シケーバ ノーン^ㄗ フスクーン ナーン^ㄗ タ シキン^ㄗヌ ^ㄗキムーン ユル^ㄗシ ^ㄗカン ナローリ ッファ^ㄗマーンケン カルイス コー^ㄗリ ヨー [ʔusangi-sokko:n ʃi:ɔ:ʃi ʃi:ke:ba no:n ɸʊsuku:n na:nta ʃikinnu kimu:n juruʃi kan narɔ:ri ffama:ŋkeŋ karuisʊko:rijo:] (終り焼香もしてさしあげてありますから、安心して神様になられて、これからは、子や孫たちに嘉例をお付け下さい <<幸福を与えて下さいね>>)

ウシ [ʔuʃi] (名) 丑。十二支の第二番目。ウシディ・プス [ʔuʃidi-pʊsu] (丑年生れの人)。ウシディ・マリ [ʔuʃidimari] (丑年生れ)。例、ウシディ・プソー^ㄗ チニビジェーラ ウシダマリティ^ㄗ ムニーン^ㄗ ピーン ナー^ㄗ ヌ [ʔuʃidi-pʊsɔ: tʃiniʧidʒe:ra ʔuʃidamariti munim bi:n na:nu] (丑年生れの方は、常日頃からおし黙って、物言いも、口論もない)

ウサンダイ [ʔusandai] (名)「おさがり」の義か。神仏へ供えたもの、供物を引き下げて後、人間が食するとされているもの。供物を下げることを、ピクン [pikun] (ひく)といい、お膳を下げることを意味する。シキ・カウ [ʃiki-kau] (供えの香)、ピキカウ [piki-kau] (引き香、下げ膳の香)によって、供物を供えたり、下げたりした。例、ムール^ㄗシ^ㄗ ウサンダイ ツファイ [mu:rʊʃi ʔusandai ffai] (皆で御馳走を食べなさい)。

ウツァナ^ㄗク [ʔutsanaku] (名) 白粉餅。大きな神事や豊年祭などの神行事の祭に用いる供物の一つ。例、プー^ㄗルン・ドーレ・ヌ ウブ・ニンガイヌ^ㄗ ピンマー ウツァナ^ㄗクン スコーリ ソー^ㄗツタ [pu:rʊn-dɔ:re-nu ʔubunigai-nu pimma: ʔutsanakun sʊko:ri sɔ:rtta] (豊年祭などの、大きな祈願の時には、ウツァナ^ㄗクも 作られた)

ウティン^ㄗガビ [ʔutigabi] (名)「打ち紙」の義。紙銭のこと。霊界の通貨と考えられており、法事の際、親戚縁者から3枚と線香3本、花米1合が贈られる。それを供えて、焼いてあげることによって先祖供養がかなえられると信じられている。ウティン^ㄗガビの原料は藁や古畳を利用するといわれ、黄色または黄褐色の馬糞紙。大きさは約18センチ×22センチ。それを二つに折って、カビシキガニ [kabifʃiki-gani] (紙つき金、紙うち。)を槌で打って銭型をつけた。横に5個、縦に7個または9個の銭型を押しつけた。銭型をつく時は、それは重ならないよう注意させられた。重なったのは、欠け銭となって、祖霊たちは

受け取らないと言われていた。ピン⁷ガン [p̄ingag] (彼岸、春分、秋分) のときに焼きあげる紙銭だけは、贈られた死者個人のワタ⁷クサー [watak̄usa:] (へそくり) になるので、紙銭を焼くことを忘れるなどと言われていた。

ウブ⁷カル [ʔubukkaru] (名)「大きな明り」の意。陽光。新生児を初めて産屋から出し、太陽の光にあてる際の、柔らかい陽光をいう。その時、祖母が、ピング [p̄iggu] (へぐる) を新生児の眉間か額につける。これを、パンシキ⁷ルン [panʃik̄irun] (判をつける) といい、これで新生児が悪霊にとりつかれることはない信じられている。例、ウブ⁷カル ウガマ⁷スン [ʔubukkaru ʔugamasun] (陽光を拝ませる)

ウブシキン・ガナ⁷シ [ʔubuf̄ik̄ig-ganaʃi] (名)「大きなお月様」の意にも用いられる。童謡に [ʔa:rukara ʔa:rio:ru ʔubuf̄ik̄ig-ganaʃi: ʔuk̄inan j̄aiman tiraʃo:ri: ho:ii tʃo:ga:] (東から上ってこられるお月様、沖縄も八重山も照らして下さい) と謡われている。月に神様が宿っておられると信じられている。十五夜には、シキマ⁷チル [ʃik̄i-matʃiru] (月祭り) の祈願も行なわれる。

ウブ⁷ティダ [ʔubutida] (名)「大きな太陽」の義。太陽のこと。アガティダ [ʔaḡatida] (『真赤な太陽』の義で、炎天下の意) ともいう。ウブ⁷ティダ ウガマ⁷スン [ʔubutida ʔugamasun] (太陽≪太陽神≫を拝ませる) のようにいう場合は、恵みをもたらす太陽神の意味あいが高く、アガティダ [ʔaga-tida] という場合は、灼熱の太陽、すべてのものを焼き尽す太陽の意に用いられ、負の意味あいが高く働く。

ウ⁷ポー [ʔubo:] (名)「威部」の義。ウ⁷ガン [ʔugan] (御嶽) の内部にある最も神聖な場所。サカサ(司)以外の人が入ることが厳禁とされている。ウ⁷ポーには香炉があり、神の依代とされる巨木、岩などがある。囲りに神木のクバ(蒲葵、びろう)やマーニ [ma:ni] (黒枕椰子) が密生している。特に必要があって、男性(ティジリビなど)がそこへ行く時は、禪の前を垂らして、無分者であることをよそおう必要があるという。

ウヤザ⁷ヌ・ニガイ [ʔujadzanu-nigai] (名)「鼠害が発生すると、友利御嶽において駆除のための祈願がなされた。その際、村ヤクサたちがウヤ⁷ザ [ʔujadza] (鼠) を捕獲して、板やクバの柄で小舟を作り、豚肉、鶏肉、神酒、ハナ米の御馳走を添えて鼠を乗せ、お嶽での祈願が終えると島の西の崎から流した。小舟を流すとき、鼠の神様に、クヌ⁷シマ⁷ツファ⁷ムン ナ⁷ヌ⁷ シ⁷マン グマ⁷ティ クナ⁷ヤ タタラン⁷バ インヌ・ホ⁷ナ インヌ・クニ⁷ナ マ⁷ビン ユチク⁷ヌ クニヌ⁷ アリベ⁷ティ⁷ ウマ⁷ナ オーリ⁷ タト⁷リ [kunu ʃima: ffaimunun na:nu ʃimag gumati kuna:ja t̄ataramba ʔinnu-ho:na ʔinnukunina ma:bin jutʃikunu kuninu ʔ aribeti ʔumana ʔo:ri tato:ri] (この島は食べ物もなく、島も小さいので、ここでは生活できないので、西の方に、西の国に、ここよりもっと豊かな国がありますので、そこへ行かれて生活して行って下さい) と祈願する。

オーシ [ʔo:ʃi] (名)「旧藩時代の村役場」をいうが、鳩間島では、旧鳩間国民学校敷地、現在の鳩間公民館の敷地をいう。旧藩時代の人頭税は、そこで徴収され、検査を受けたといわれている。スクマ [sɯkuma (稲の初穂祭)には、オーシの護岸の上に早朝からサカサ [səkasa] (神司)が座して待機している所へ、夜明けと同時に西表島からサバニで初穂を持参した村人たちが、サカサの前にそれを献上するために駆け登ってくる。マイヌガッコーヌ シキチェー ムカシヌ オーシヌ アトゥ ヤローツタ ツォー [mainu gakkōnu ʃikitʃe: mukafinu ʔo:ʃinu ʔatu jaro:tta tso:] (前の学校の敷地は、昔のオーシの跡であったそうです)。オーシナーティル ニング ゴーノーヤウサモータ [ʔo:ʃina:tiru niggu dzo:no:ja ʔusamotta] (オーシにおいて、年貢上納はお納めになられた)

カーヌ・ニンガイ [ka:nu-nigai] (名)「井戸の願い」の義。インヌ・カー [ʔinnu-ka:] (西村の村井戸)は、ナカンテー [nakante:] (仲本家)の人が、ウイヌ・カー [ʔuinu-ka:] (上の井戸)は、カザケー [kadzake:] (加治工家)の人が、アンヌ・カー [ʔannu-ka:] (東村の村井戸)は、クメー [kume:] (小浜家)の人が祭った。カーヌ・ニンガイ ユン ミジニーナル ニガイオーツタ [ka:nunigaijum midzini:naru nigaiotta] (「井戸の願い」も壬の日に祈願なされた)。インヌ・カーヤ ナカンテヌ プスヌ ニガイ オーリ ウイヌ・カーヤ カザケヌ プスヌ ニガイ オーリ アンヌ・カーヤ クメーヌ プスヌ ニガイ オーツタ [ʔinnu-ka:ja nakantenu pɯsunu nigaiori ʔuinu-ka:ja kadzakenu pɯsunu nigaiori ʔannu-ka:ja kume:nu pɯsunu nigaiotta] (西の村井戸は仲本家の人が祈願され、上の村井戸は加治工家の人が祈願され、東の村井戸は小浜家の人が祈願された)。

カウ [kau] (名)「香」の義。線香のこと。イツァ・カウ [ʔitsa-kau] (「板香」の義。巾約1.2センチ、長さ約15センチ、厚さ約1.5ミリの板状の線香)、ピーマチ・カウ [pi-matʃi-kau] (「日待ち香」の義か。長時間香をたく必要がある時に用いる)、タキカウ [təkikau] (「竹香」の義。竹ひごの先端部が線香になっているもの。イツァカウとともに、沖縄在来の線香といわれている)、ヤマトウカウ [jamatukau] (大和香)などがある。普通は、線香3本ずつ立てて祈願するが、重要な祈願では、イツァカウ(板香)を3枚、または5枚と重ねて焚き、コーロ [koro] (香炉)に立てて祈願する。例、カウ・ヤンツァン シキ タティティ パラリル [kau-jantsan ʃiki ʔatiti parariru] (線香だけでも、焚いて、立ててでないといけないよ)

カキング [kəkingu] (名)「格護」の義か。ヤーヌ カキング [ja:nu kəkingu] (家の保護。暴風対策。家の補修、修理保全)、イクムシヌ カキング [ʔikimufinu kəkingu] (家畜の保護)などのように用いられる。例、タイフーヌ キーベータィ ヤーヌ カキング シー シキラ [taiφunu ki:beti ja:nu kəkingu ʃi: ʃikira] (台風が来

るので、家の台風対策をしておこう)。七十歳以上の人々が使用する。

カニ [kani:] (名)「金の兄」の義。「金の弟」(辛)も含めていう。庚。十二支の第7日と第8日をいう。ニンガイゴトー カニナーン ナリヲス パジェー アランカヤー [niggaiguto: kani:na:n narisu padʒe: ʔaraŋkaja:] (願いごとは庚の日にもできるのではないだろうか)

カビシキ・ガニ [kabifjiki-gani] (名)「紙搗き金」の義か。馬糞紙に銭型を打ちつけるために用いられる道具。木製と鉄製がある。直径1.5センチ、長さ約12センチ程の円柱状の型棒。底部は銭型の鋳型状になっている。これを木槌などで打って搗き銭型を作る。例、ワーゴ ピマー ヤルカカー カビシキ・ガニゴシー ウティンゴガビ シッコキ ツフィーリ [wa: pima: jaruka: kabifjiki-ganifji: ʔutiggabi fjikki ffi:ri] (君は、暇なら、紙搗金で紙銭をついてくれ)

カビヤキムヌ [kabijaki-munu] (名)「紙焼きもの」の義。紙銭を焼きあげるための容器、器具。金属製の小型の金盥に、バサノヌ・ウディ [basanu-udi] (芭蕉の葉柄)を約1尺の長さに二本切り揃え、ユシノキ [jufjiki] (ススキ)の生木2本(約30センチ)で、井の字形に刺し、その上で紙銭を焼くようにしたもの。ススキのノバシ [paʃi] (箸、長さ約30センチ)を用意し、それで紙銭をはさんで焼く。

カミニンゴトウ [kaminintu] (名)「神年頭」の義。旧暦の正月元旦の日の朝、サカサ [saka:sa] (司、神女)ヤティジリノビ [tidʒiribi] (男の神人。「手摺りべ」の義か)がノウガン [ʔugaŋ] (「お願い」の義、御嶽)で神様に対して行なう年始の挨拶。新年の報告と、新年度中の村人の健康と村の繁栄を祈願する。新暦の正月にはカミニンゴトウは行なわない。新正月に統一されて後にも、神司の家では旧正月を行なった。

カムラーマ [kamura:ma] (名)カムラーマ神。「禿神」の義か。頭には、びろう(蒲葵)のフーカラ [Φu:kara] (棕櫚毛。赤褐色)で作った短い鬘をかぶり、クバオンギ [kubaonggi] (葵扇)で煽りながら、子供を多く従えて踊る。この踊りは必ず黄色の着物を着て踊る。カムラーマに扮する男は、クメー [kume:] (小浜家)の血を引く人といわれている。これも子孫繁栄と豊穡を予祝する芸能といわれている。

カラマース [kara-masu] (名)「力塩」の義。健康祈願のため、真白の塩を盃に入れ、山型にしたものを皿に移し、お膳に入れて床の間のコンゴジ [kondʒiŋ] に供えたもの。正月元旦に家長より、ゴグシ [guʃi] (神酒屠蘇の一種)を戴いた後、カラマースを箸でつまんで戴く塩。例、ゴグシーン カミ カラマースノ カミバ [guʃi:ŋ kami karama:su:ŋ kamiba] (神酒も戴き、力塩も戴きなさいよ)

カシノキ [kafjiki] (名)お盆の「送り」の日の夕食として仏壇に供える御飯。糯米のご飯にアガマミ [ʔagamami] (小豆)を混ぜて炊いたもの。クシノキ [kufjiki] (甑で蒸しあげた御飯)のように美味であるが、少々硬い。例、ユーボンノマー カンノキ スコーリノ マチノ

- ヨー [ju:bomma: kaŋki sɯkorri matʃijo:] (夕飯には、カンキを炊いて供えなさいよ)
- カンヌ・ミチ [kannu-mitʃi] (名)「神の道」の義。伝承によると、フナバルパマ [ɸunabarupama] (船原浜) から、ウイヌヲ・ウガン [ʔuinuugag] (友利御嶽) まで、村建ての神々が通られたといわれる道がある。それを「神の道」という」という。また、ウイヌヲ・ウガン (友利御嶽) からヨークァヤー (西原家) の東のピチルの所へ通ずるカンヌミチ (神の道) があって、そこを通過してサカサ (司) たちがカンアサツビ (神遊び) をされたという。
- カンプス [kampusu] (名)「神人」の義か。サカサ [sɯkasa] (司)、ティジリツビ [tidziri-bi] (男の神役を、カンプスと称することもある。サカサ (sɯkasa) は、沖縄本島の「さすかさ」が訛って「サカサ」となったものであろう。例、カンプスンケンヌ アツァマロールン [kampusunkennu ʔatsamarorun] (神人たちが、お集まりになる)。
- カンプトウキ [kampusutuki] (名)「神仏」の義。鳩間島では、人が死んで三十三年忌を済ませると神になると信じられている。弔上げの済んだ祖霊は、仏壇に祭られてはいるが、ヲウヤパーブジ [ʔujapa:budzi] (「親母大父」の義。祖先神のこと) と称えられ、神として子孫を守護すると信じられている。ウサンギソッコー シーオースヲカー ウヤツプソー カンプトウキ ナロール [ʔusangi-sokko: ʃio:su-ka: ʔujapuso: kampusutuki naroru] (弔上げ≪三十三年忌≫の焼香≪法事≫が済むと、祖霊は神仏になられる)。
- ツキニー [kini:] (名)「木の兄」の義。^{キエ}甲。十干の第1日、第2日を含めていう。兄、弟を区別しないで、ツキニーの一語でいう。クンドウヌ ニンガイヲヤー ツヌーニナル アタルヲカー [kundunu ningaija nu:ninaru ʔatarukaja:] (今度の祈願は何の日に当るのだろうかねえ)
- クー・ヲ・ピキ [ku:piki] (名)「粉碾き」の義。ムチマイ [mutʃimai] (糯米) を一定時間水に漬けてふやかし、それをウーツキ (桶) の上にアジママー [ʔadzima:] を置いて、イソーシ [ʔiso:ʃi] (石臼) を乗せ、糯米を石臼に入れて臼を回わし、水を少しずつ流しこんで碾く。乳液状の汁が桶に溜まると、それをミリキンツグ (メリケン粉) の袋に入れて水切りをする。袋の上に石臼をのせておくと、1晩で水切りが完了し、デンプンがとれる。これを成形して蒸すと餅ができる。
- クー・ヲ・バリ [ku:bari] (名)「粉割り」の義。糯米や粳米を一定の時間 (6～8時間) 水に漬けた後、水切りをして、搗き臼に入れ、杵で搗いて製粉すること。粗く割れた時点で取り出し、ソーキ [soki] (箕) に入れて、ツシノー—fino:] (篩) にかけて、残りを再び臼に入れて搗き、製粉すると、メリケン粉のような細かい粉ができる。ミリキンツグ [mirikingu] (メリケン粉) のなかった頃は、餅を成形する際にこれを用いた。
- ツグシ [guʃi] (名)「御水」の義か。酒のこと。神仏に供えた酒の意に用いる。サキ [sɯaki] (酒) は酒の一般的呼称。ツグシ カミツリ [guʃi kamiri] (神酒を恭しく頭の上

まで持ち上げて、いただきなさい」というが、サキ（酒）の場合は、サキヌミ [saki numi]（酒を飲め）のようにいう。儀式や改まった場面ではㇿグシ [guʃi] を用い、日常の場面では、サキ [saki] を用いる。ㇿグシサイㇿバ [guʃi sai-ba]（神酒を注ぎなさいよ）。

ㇿグシ・パナ [guʃi-pana]（名）神仏に供える酒と花米（米のお初）のこと。神事や仏事（法事）の際に供えられる酒と米で、酒は白磁製のカンㇿビン [kambiq]（燗壺）にイチー [ʔittʃi:]（一対）、花米はジブㇿク [dʒibuku]（重箱）に1合、3合、5合、9合のように入れて神前や仏前に供えるもの。例、ㇿグシパナーン スコーリ マチㇿ [guʃi-pana:n sʏko:ri matʃi]（神仏に供えるお酒や花米を用意して、お供えしなさい）

ㇿグソー [guso:]（名）「後生」の義。死後の世界。グソーンㇿプス [guso:m-pʏsu]（後生への旅。死出の旅、葬式）などという。ソーランㇿヌ ウヤㇿプスケーヤ シンザㇿバ アイㇿク シーㇿグソーㇿヌ コシトウ カタㇿミ オーㇿルツォー [so:rannu ʔujapʏsuŋke:ja ʃindzaba ʔaiku ʃi: guso:nu ʃitu kaʔami ʔo:ru-tso:]（精霊会の祖霊たちは、キビを担ぎ棒にして苞を担いで行かれるそうだ）。

ㇿクバン [kubaŋ]（名）、昔は牛肉の燻製を用いたというが、戦前戦後にかけて魚の燻製を用いるようになってきている。約1センチ角で、長さ約10センチに切ったもの。それを7本または9本に束ねて、クバン皿に入れ、塩とニンニク（ピル [piru]）三片を添えたもの。クバンを束ねたものを、ムリクバン [murikubaŋ]（盛りクバンの義か）という。ムカㇿシュー クバンㇿマー ウシヌㇿニク シウカイオーㇿツタ [mukaʃe: kubamma: ʔuʃinu niku ʃikaio:tta]（昔は、クバンは牛の肉を使われた）

グワンㇿス [gwansu]（名）「元祖」の義。祖先。先祖。位牌。グワンスㇿグトウ [gwansu-gutu]（元祖事、祖先を祭る法事）。グワンスㇿムチ [gwansu-mutʃi]（先祖供養をすべき位牌をもち、継承しなければならない人）。グワンサバㇿキ [gwansu-sabaki]（元祖を捜すこと。血筋をただして、元祖を祭ること。ユタㇿサンギンソー [sagginso:] などの、ムヌㇿシリ [munuʃiri]（物知り）に頼んで、先祖供養の不足分を補足したり、元祖を正したりした）。

コーㇿロ [ko:ro]（名）香炉。神や祖霊を祭るために、線香を立てるのに用いる、灰や砂の入った陶磁器。直径約17～18センチの広口の鉢型のものが、ウブコーㇿロ [ʔubu-ko:ro]（大香炉）といわれており、香炉は大型のものほど子孫繁栄につながるといって喜ばれる。一番座のザㇿトウㇿク [dza:tʏku]（床の間）のコーㇿロは、コンㇿジン [kondʒiq]（「根神」の義か）といわれ、家の香炉として継承される。家には、代々のコーㇿロと、妻が嫁入りした際に里から分けてたてたコーㇿロや家の女たちの香炉がある。個人の香炉をたてることを、コンㇿジン タテㇿルン [kondʒin taʔirun]（根神をたてる）といい、娘が嫁入りしていく場合に、里の香炉を廃して、その灰を持って婚家で新たに香炉をたてるが、里の家の香

炉を廃することを、コン²ジン ピクン [kondz̄im p̄ikuḡ] (根神を退く) という。

ザーアタル [dza:ataru] (名)「座当たり」の義。座敷担当の意。西村、東村より各2名選ばれた。豊年祭や結願祭などのような大きな村行事の際、棧敷の準備、舞台設営、友利御嶽でのユードゥーシの際の諸準備等を取りしきった。また、ヤク²サの指導のもとに、供物のカマブク [kamabuku] (かまぼこ) やク²バン [kubaḡ] の準備に当たった。例、キチゴンヌ² ピンマー ザーアタ²ロー ヤーカー²ジラ ムス カリク²タ [k̄it̄figonnu p̄imma: dza:ataro: ja:k̄a:d̄zira musu kariku:ta] (結願祭の時は、ザーアタルは各家から庭を借りてきた)。

サーダカ・マリ [sa:daka-mari] (名) 霊力が高く生まれついた人。虚弱体質の人で、神がかりしやすい人。日常的に、そのような雰囲気を持たせている。例、サーダカマリ シーブ² プソー² ヨー イッケナ² ムヌ² ミルンダー [sa:dakamari-si:bu-p̄uso: jo : ʔikkena munu mirun da:] (生まれつき霊力の高い人はねえ、よくモノ²《生霊や死霊》を見るんだよ)

サカサ [s̄akasa] (名) ツカサ(司)の義。神司のこと。神女。一定の血統(シジ [ʃidzi] (《筋、血筋》、ピキ [p̄iki] 《血族》)より、一定のウガン [ʔugaḡ] (御願、御嶽)のサカサが生れる。サカサになることを、ヤマ ダクン [jama dakuḡ] (御嶽をいただく) という。サカサになる女性は普通から、シジダカマリ [ʃidzidakamari] (霊高き生まれ) といって、神霊が憑依しやすいといわれている。サーダカマリ [sa:dakamari] ともいう。特定の御願のサカサに欠員が生じた場合、それぞれのピキ [p̄iki] (ひき、血統)の願で祈願をし、ウク²ジ・バリ [ʔukudzi-bari] (神籤を占い)、後継者を決定したり、または、シジダカマリ [ʃidzidakajari] (セジ高く生れついた人) で、病弱な状態が続いた場合、石垣島のサンギンソー [sanginso:] (三世相) やユタ [juta] (神がかりの状態)で神仏と交流することのできる霊能者、坐女)に観てもらい、継ぐべき神司職を決めてもらうことがある。また、本人が神がかり状態となって、神司職を継ぐべき御願の神意を告げることもある。こういう状態を、フダマルン [ʔudamaruuḡ] (神がかかる) という。例、ドック ビョー²ザー ナリベ²ティ ムヌ²シリ トッキユタ²ヌ ヤー ギー ムヌ²ナライ シティ²キー カンヌ²・マイン ッサリ² ウク²ジ バリティ² ヤマ ダコー² ヲタ [duku b̄jo:dza: naribeti munufiri t̄ȳkijut̄anu ja: gi: mununarai ʃ̄it̄iki: kannu-main ssari ʔukudzi bariti jama dakotta] (あまりにも病弱であったので物知り、時ユタ²の家に行って、物習いをしてきて、神の前にも申し上げ、神籤を引いて占っていただいて、山を抱かれた《神司職につかれた》)

ツサバー²ヌ・ニガイ [ssaba:nu-nigai] (名)「草葉の願」の義。米、麦の葉が枯れる病気に罹らないように祈願するもの。ニンガチニンガイ(二月願い)の中で祈願される。米や麦の葉を「草葉」と言うところは、植物分類を、民俗的には「草」と認定しているところか

ら、苗の段階の稲や麦を示していることになる。この時期降雨が少ないと緑の葉が黄変して稲は生気を失ない、枯れていくので、それを防ぐ意をこめて祈願する。

㊦サル [saru] (名) 申。十二支の第九番目。㊦サディ・プス [sadi-pusu] (申年生れの人) ㊦サディ・マリ [sadi-mari] (申年生れ)。サン㊦ヌ・パー [sannu-pa:] (申の方向。西南西)。例、サン㊦ヌ パー ㊦シノー ミド㊦ン・ッフアヌ シティントン [sannu-pa: jino: mido:nffanu ʃʃintog] (申の方角≪屋敷の中の南西の角≫は、出戻り女≪娘≫の捨て所≪家を建ててやる所。建ててやってもよいと言われている所≫だ)

㊦ツサレー [ssare:] (名) ①知らせ言。言上ごと。申し上げごと。②それをする人。パマウリソージの前々日、村のヤク㊦サ [jakusa] (村役人) の中の誰か、声色を使って知らせごとをして回る。その言上する内容は「あさっては浜下りソージに当たっているから、籠の辺りを掃除して、火の用心を怠りなくして下さい」ということである。人々は、それを神の使者として対応した。ツサレーツサレー (申し上げます) といって各戸を回った。→パウマリソージ。

㊦サン [sag] (名) 呪具の一つ。①ユシキ [juʃiki] (すすき) の茎を十字形に結んだもの。田畑に播種した後、それを差して魔除けとした。畑に差す場合、角の方から三步内側へ進んで差すといわれている。㊦シチ [ʃʃtʃi] (節祭) のときは、それに桑の枝を添えて家の四角の軒に差した。②藁しべや、㊦ブー [bu:] (苧麻糸) で十字形に結んだもの。これは、神仏への供物を運ぶ際、道中の魔除けとして添えておくのに用いる。また家の中にあっても、食物などに悪霊が欲しがって手につけないように、魔除けとして膳などに添えておいた。フタディル [ʔʔtadiru] (蓋付箆) などに昼食を入れておく際にも、このサンを添えておいた。例、ユシキ㊦ヌ ㊦フキシ ㊦サン ユイティ㊦ パタ㊦キナ ㊦ツシケー [juʃʃkinu ʔʔkifi san juiti paʔakina ʃʃi-ʃʃke:] (ススキの茎でサンを結んで、畑に差しておいてある。

㊦サンシキ [sanʃiki] (名) 「棧敷」の義。プー㊦ル [pu:ru] (豊年祭) のゾーラキ [dzoraki] (芸能) が上演される所。海岸道路と東村と西村の境界道路の交わるアイ㊦ザムトゥ [ʔʔaiazamutu] (合流点・交差点) の東南の空間。ピナイ御嶽の東側に位置する。1960年頃まで、周囲3メートルを超える巨木が二本、海岸側へ大きく枝を伸ばしていたが、大型台風で、このアコーキー [ʔʔako:ki:] (アコウ) も幹から折れて枯れてしまった。ピナイお嶽のヤラブの巨木が折れた時と同じ台風による被害であった。

豊年祭は、この空間で東村と西村のカ㊦ラ [kaʃira] (旗頭) を立てておき、東、西対抗のゾーラキ [dzoraki] (芸能)、㊦バウ [bau] (棒踊)、シナ㊦ピキ [ʃinapiki] (綱引き) が行なわれ、その海岸では、パーレー [pa:re:] (爬竜船) が漕がれた。

㊦サンボー [sambo:] (名) 「三方」の義。お盆や、㊦シンズク [ʃindzuku] (四十九日の法事)、ジュー㊦・サンニンキ [dʒu:sannigki] (十三年忌)、ニジュー・グニンキ [nidʒu:

gunigki] (二十五年忌)、ウサンギソッコ [ʔusaggisokko:] (三十三年忌) などの法事に、シンヅァ [ʃindza] (砂糖キビ) を束ねてムルムルにし、それを乗せて供えるのに用いる台。脚付きの台で、前方、両側面に直径約5センチほどの円形の穴をあけてある。

シー [ʃi:] (名)「精」の義か。キーヌ シー [ki:nu ʃi:] (木の精) などのようにいう。木に宿る精霊のこと。ガジマルの古木、大木には精霊が宿っているとされる。昼でも、ガジマルや福木の太木の下で寝ると、体が金縛り状態になることがある。これを、木のシー(精)に、ウソーリン(襲われる)という。ガジマルヌ ッサーンナ ニブカー キーヌ シーンウ ウソーリン [gadʒimarunu ssa:nna nibuka: ki:nu ʃi:n ʔuso:riŋ] (ガジマルの下に寝ると木の精に襲われる)

シーシヌ・キン [ʃi:ʃinu-kin] (名)「獅子の衣」の義。獅子頭につけて、獅子舞いをするのに用いるもの。サミ [sami] (月桃) の幹を打ち裂いて乾燥し、これ縋って縄にし、目の粗い網を編んで、それに芭蕉の皮を打ち裂いて乾燥した繊維を結えて獅子の着物とした。サミの代わりに、フーカラで縋った縄を用いることもあった。これは西村、東村の子供たちが、盆の月に入ると集まって準備をしたものである。

シーシ・マーシ [ʃi:ʃi-ma:ʃi] (名)「獅子舞わし」の義。シーシ・パーシ [ʃi:ʃi-pa:ʃi] (獅子はやし) ともいう。普通、獅子頭を持つ人と、尻尾を動かす人の二人で舞われる。ビーロビ、ビーロビー、という一定の曲に乗せて、百獣の王よろしく、ゆっくりと力強く舞うことによって、悪霊を祓い、邪気を祓うものと信じられている舞い方と、モーヤーなどの歌曲にのせて踊ることによって、祖霊を慰める舞い方があるといわれている。

シーシ・マツリ [ʃi:ʃi-matsuri] (名)「獅子祭」の義。お盆の中日に、ダイケー(大工家)と、クメー(小浜家)で行なわれる獅子供養の儀式。グシ・パナ [guʃi-pana] (酒と花米) を供え、香を焚いて行なわれる。当日夕刻、化粧され、飾りたてられた獅子頭の前に、当家の家主が供物を供え、香を焚いて祈願する儀式。それが済んで後に獅子舞いが行なわれる。獅子祭りの酒は、集まった人々にふるまわれた。

ジー・シンカ [dʒi:ʃiŋka] (名)「地臣下」の義。地謡衆の意。シンカ [ʃiŋka] (臣下) は、鳩間島では、カツシン・シンカ [kaʃufin-ʃiŋka] (鰹船の乗組員、仲間) などのように、ウヤカタ [ʔujakata] (親方) に対する。組合員、仲間の意味に用いている。三味線音楽に秀れた者たちが、その道の先輩を中心にして地謡のグループを結成し、日頃から暇をみつけて練習に励んだという。結願祭や豊年祭にも、地謡として活躍した。

ジヌギ [dʒi:nugi] (名)「地抜き」の義か。旅先や海上などで死んだ人の霊は、落命(臨終)の地に落ちて迷い、成仏できずに苦勞していると信じられている。従って、できるだけ早く、その地へ行き、地の神や龍宮の神に祈願して、霊を解放してもらい、成仏させるための祭事を行った。老婆やサカサに頼んで祈願してもらおうか、ユタを頼んでジヌギをもらうこともある。祈願の仕方を誤ると、なかなか霊界に通らないこともあるとい

う。

シジ [ʃidʒi] (名) 「セジ」の義。神霊のこと。シジダカ・マリ [ʃidʒidaka-mari] (生れつき神霊の憑きやすい人。霊力の高い人)、サーダカマリ [sa:daka-mari] (霊力の高い人)、シジダカーン [ʃidʒidaka:ŋ] (形) (霊力が高い) などのようにいう。

例、ウヌ・プソー^{ツチノエ} シジ^{ツチノエ}ヌ タカー^{ツチノエ}ティ ビー^{ツチノエ}ラーン [ʔunu-pʊso:ʃidʒinu tʰaka:ti bi:ra:ŋ] (その人はセジが高いので、体が弱く、病弱である)

シジダカーン [ʃidʒidaka:ŋ] (形) 霊力が高い。人や場所などにいう。御願 (家嶽) などは樹木がうっそうとおい茂り、クバの木が生え、福木やヤラブの巨木が密生していて、そこへ行くだけでも鳥肌がたつような雰囲気をつたよわせている。例、ウガン^{ツチノエ}マー シジ^{ツチノエ}ダカーン^{ツチノエ}ト^{ツチノエ}ン ヤリ^{ツチノエ}バ^{ツチノエ} ヲ^{ツチノエ} マ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ} ペ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ} シ^{ツチノエ} ナ^{ツチノエ} ダ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ} ヲ^{ツチノエ} [ʔugamma:ʃidʒidaka:n-ton jariba ʔuma:pe:nna da:] (お願≪拝所≫はセジ高い所だから、そこへ入るなよ)。

シチ^{ツチノエ}ニ^{ツチノエ}ー [ʃitʃini:] (名) 「土の兄」の義。「土の弟」も含めていう。戊。十干の第5日と第6日をいう。例、ムヌ^{ツチノエ}スク^{ツチノエ}ル^{ツチノエ}ヌ^{ツチノエ} ニ^{ツチノエ}ン^{ツチノエ}ガ^{ツチノエ}イ^{ツチノエ} ヤ^{ツチノエ}ル^{ツチノエ}ン^{ツチノエ}ダ^{ツチノエ} シ^{ツチノエ}チ^{ツチノエ}ニ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ} ナ^{ツチノエ} ア^{ツチノエ}ティ^{ツチノエ}ティ^{ツチノエ}ニ^{ツチノエ}ガ^{ツチノエ}イ^{ツチノエ} オ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ}ル^{ツチノエ}カ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ} ヲ^{ツチノエ}ミ^{ツチノエ}サ^{ツチノエ}ン [munusʉkuru nu niggai jarunda ʃitʃini:na ʔatitini gai ʔo:ruka: misaŋ] (物作≪農作物≫の祈願だから戊の日にあてて、その日を選んで祈願されると、よい)

シチヌ^{ツチノエ}カ^{ツチノエ}ン [ʃitʃinu-kaŋ] (名) 「土の神」の義。土地には、その土地を支配する神がいると信じられている。従って、特定の土地を利用して何かをする場合、その土地の神の許しを乞う祈願をしたり、特定の地で落命した場合、ジー・ヌギ [dʒi:nugi] (その土地に落ちている霊を、土の神、所の神に祈願して、その霊を然るべき所へ移動させる祈願) などを行って、シチヌ^{ツチノエ}カ^{ツチノエ}ン^{ツチノエ}に対する儀礼を怠らない。

シディ^{ツチノエ}ヲ^{ツチノエ}ミ^{ツチノエ}ジ [ʃidimidʒi] (名) 「瞬で水」の義。若水のこと。正月の元旦の早朝、村井戸から水を汲んできて、それで洗面すると長寿になるといわれていた。誰も起きないうちに、インヌカー [ʔinnuka:] (西村の村井戸) から水を汲んできた桶を、一番座の軒下に置いて、それで家族の者が洗面した。シディ^{ツチノエ}ヲ^{ツチノエ}ミ^{ツチノエ}ジ^{ツチノエ} シ^{ツチノエ}ラ^{ツチノエ} ア^{ツチノエ}ライ^{ツチノエ}ティ^{ツチノエ}ル^{ツチノエ} ニ^{ツチノエ}ント^{ツチノエ}ウ^{ツチノエ}ン^{ツチノエ} ソ^{ツチノエ}ー^{ツチノエ}ツ^{ツチノエ}タ^{ツチノエ} [ʃidimidʒiʃi ʃira ʔaraitiru nintu:n so:tta] (若水で顔を洗って年頭の祝詞も述べられた)。

シト^{ツチノエ}ウム^{ツチノエ}ティ^{ツチノエ}ヌ^{ツチノエ}・パイ [ʃitʉmutinu-pai] (名) 「朝^{つとめて}の拝」の義。午前5時頃に行なわれる祈願のこと。ユナカ^{ツチノエ}ヌ^{ツチノエ}・パイ^{ツチノエ}から、シト^{ツチノエ}ウム^{ツチノエ}ティ^{ツチノエ}ヌ^{ツチノエ}・パイ^{ツチノエ}の間には飲酒、歌舞が行われるが、中には仮眠をとる人もあった。夜通し三味線をひき、大鼓を打ち鳴らしつつ神歌を歌い、民謡の数々を謡いながら睡魔を払って徹夜の祈願をしたのである。これが済むとサカサをやティジリビたちや有志の人たちは、サカサを先頭にしながら御嶽を下りて家路につくのである。

シナ^{ツチノエ}ヲ^{ツチノエ}ピ^{ツチノエ}キ [ʃinapiki] (名) 綱引き。豊年祭の最終日、東村 (雄綱) と西村 (雌綱) に分れ

て豊年予祝の綱を引く儀式。プールの第三日、朝から各村の青年たちが各戸から徴収した稲藁で大綱を作る。大綱は耳の部分に藁束を巻きこんで、直径30センチ程の大綱に作ってあるもので、雄綱、雌綱の耳を重ね合わせてカヌチボー [kanutjibo:] (「門棒」の義)で固定して引く。雄綱、雌綱を合わせることは、生殖行為と信じられている。その際、シナヌ¹・ミン [ʃinanu-mig] (綱の耳を寄せる儀式)を寄せ、東村(男性)からは五穀の入った籠を西村(女性)へ渡し、西村からは神酒の入った瓶を東村へ渡す儀式のあった後に綱引きが始まる。アラブシケー [ʔarabʃike:] (東大城家、大工家)の血を引く女性やイラ¹ブレ [ʔirabure:] (西原家)の血を引く女性が西村のシナヌ¹ミンの女性役になった。シナ¹ピケー インタヌ¹ カツカー ユガフ¹ ツォー [ʃinapike: ʔintanu kaʃtsuka: juɡa ɸu tso:] (綱引きは西村が勝つと豊年だそうだ)

シマム¹チ・ユームチ [ʃimamutʃi-ju:mutʃi] (名)「島持ち世持ち」の義。スー¹ダイ (総代)のこと。昭和30年頃までは、島の一年間の神行事を取り行うことが島の行政を意味していた。戦時中に部落会長が誕生するまでは、スー¹ダイが島の行政責任者であったが、戦後の町制移行に伴ない、部落会長、区長、公民館長へと変化していった。かつてはシマムチユームチになることが最高の立身出世であったことが、民謡の中で謡われていることから知られる。男子が生まれると、シマムチ・ユームチにして下さいと祈願した。

シラシグトウ [ʃiraʃigutu] (名)「神仏の知らせごと」の義。犬が普通と変わった鳴き声で鳴くと、その犬の向いた方角の家にかか¹起きるとか、鶏が変な鳴き方をするとき、その向いた方向の家に異変が起こるとか、鳩など鳥類が家の中に飛んで入ると異変が起こるといわれているのも、神仏の知らせごとだといわれている。イン¹ヌ ナーブイ シーベ¹ヌ ヌー¹ヌ シラシグトウ¹ヌ¹ アルカヤー ムヌシリ¹ヌ¹ ヲヤー ギー¹ミリ [ʔinnu na:bui ʃi:bernu nu:nu ʃiraʃigutunu ʔarukaja: munuʃirinu ja: gi:miri] (犬が長吠えしているが、何の知らせごとがあるのかしら、物知りの家に行ってみてごらん)。

ジル¹クンチ [dʒirukuntʃi] (名)「十六日祭」の義。グソー¹ヌ ソンガチ [ɡuso:nu soggatʃi] (後生の正月)といて、鳩間島では盛大に祖霊を供養した。墓の周囲の掃除をし、雑草を取り除き、木の枝うちをして、浜から砂を運び、墓前に敷いて当日を迎えた。当日は餅(ッスムチ [ssumutʃi] <白餅>、¹バタムチ [batamutʃi] <餡餅>等)、豚肉、カマブク [kamabuku] (かまごこ)、¹タク [taʃaku] (蛸)、ティン¹プラ [timpura] (てんぷら)などの御馳走と、サキ¹ [saʃki] (酒)、パナン¹グミ [panaggumi] (初米)、ウティ¹ガビ [ʔutigabi] (紙銭)などをバキトゥリ¹ブンに入れて供え、墓前で紙銭を焼いて祈願した後、ご馳走をいただいた。一族が墓前に集まって会食し、親戚の墓前へも、¹グシパナ [ɡuʃipana] (酒と初米)、カウ [kau] (線香)三枚、ウティン¹ガビ (紙銭)三枚、白餅三枚、¹ウサイ [ʔusai] (「お菜」の義か。魚やかまぼこ等)をプス¹・サラ [puʃu:sara] (一皿)持参して供えた。嫁は里の墓前に供える際、特に重箱に餅と魚や肉類なども詰め

て持参した。パトゥマナテー ジルクンチュー グソーヌ ソンガチティ シー
 イッケナ セイダイニ ソーッタン [pātumanate: dʒirukuntʃe: guso:nu songatʃiti
 ʃi: ʔikkena seidaini sōttan] (鳩間では十六日は後生の正月とって、非常に盛大にな
 された)。

ジンバイ [dʒimbai] (名)「膳配り」の義。キチゴン [kʲitʃigōŋ] (結願祭)、プー
 ル [pu:ru] (豊年祭)のような、大きな村行事の際、各家から膳や皿など、神祭りに必要な
 什器類、什物類を借りたり、返却したりする係。最も年少の者が当たった。西村、東村より、
 各2名が選ばれた。祭りの当日は、供物の運搬等にも従事した。

例、ジンバイヤメー イッチン トゥシヌ バカー ムンドゥ ナッタヨ
 [dʒimbaija me: ʔittʃin tʃʲinu baka:undu natta jo:] (配膳係は最も年の若い者が
 なったよ)。

スーダイ [su:dai] (名)「総代」の義。部落会長に相当する役職。現在では公民館長がそれ
 に相当する。部落行事の総責任者。シマムチ・ユームチ [ʃimamutʃi-ju:mutʃi] (島持ち
 世持ち)ともいう。昭和30年頃まで、島の新年第一回の部落常会で選出されていた。西村、
 東村の総代表で、島の神行事や部落の行事について、サカサやティジリビと相談してとり
 決め、執行する責任者であった。これに選出されることは大変名誉なことで、部落へのお
 礼として、常会の席で酒を寄贈するのが習慣であった。

スクマ [sʏkuma] (名)新米の初穂を神に供える祭事。旧暦5月のミジニー [midʒini:]
 (壬)の日を選んでとり行われた。その年の稲作の稲穂の色づき具合を見ながら、ピュー
 ル [pju:ru] (日どり)をとった。スクマの前日、鳩間島の人々は西表北岸のター・タバ
 ル [ta:tabaru] (田原、田地)、タースク [ta:sʏku] (田づくり)の各自の小屋に泊って、
 朝の暗いうちに稲穂を積んで船出し、鳩間島のマイズニ [maidzuni] (前の曾根。リー
 フ)のあたりに碇泊して、夜明けと共に一斉にオーシの浜に船を着けて、稲の初穂
 を持ってサカサ [sʏkasa] (司)の前に供える。百艘ほどのイダフニ [ʔidaΦuni] (板舟、
 サバニ)が稲穂を積んで、帆を張ってオーシの浜に向う光景は誠に壮観であった。初穂を
 サカサに供えた後は家に帰り、ピナカン [panakag] (火の神)に初穂を供え、トゥクニ
 [tʏkuni] (仏壇)にも供えて報告し、感謝すると共に、無事に収穫が終えられるよう
 祈った。家での祈願は、ブナルンガン [bunaruggag] (ヲナリ神)と称される、戸主の姉
 妹が当たった。その日の夕方には新米を精白して作ったイバチ [ʔibatʃi] (「飯初」の義。
 円錐形に成形した米飯。おにぎりの一種)を3個ずつ皿に乗せ、親戚の家の仏前にも供え
 させた。スクマが終ると、ピラキ [piraki] (ピダキともいう。笛のこと)やドゥラーン
 [du:ran] (銅鑼)等を打ち鳴らすこともよいと言われていた。また、田の畦の枯れ草を
 燃して、カマイ [kamai] (猪)が田に近づかぬようにすることもできた。スクマヌ
 オーカ ピダキーン ドゥラーンユン ウティミサンティ アゾーッタ ヨー

ムカヲシプソー [sykumanu ʔoruka pidaki:n dura:pju ʔutimisanti ʔadzotta jo:mukafipuso:] (スクマが来られたら、笛も銅鑼も打って鳴らしてもよいと言われたよ、昔の人は)

スクミ [sykumi] (名)「仕組み」の義。リハサールのこと。豊年祭や結願祭の時に、踊りや狂言(キョ^ニン^ニギン [kjoggig] <劇>のこと)の練習をするが、バング^ニバリ [bagubari] (番配り、番組割、プログラム)に従って、総仕上げの練習をすることをいう。例、^ニアツァー スクミ ヤルンダ キュー^ニヌ ウチ^ニナー ブドゥルキン^ニ スコーリ [ʔatsa: sykumi jarunda kju:nu ʔutjina: budurukin sykori] (明日は仕組みだから今日中に踊り衣裳を準備しなさい)。

ツス^ニ・ムチ [ssu-mutji] (名)「白餅餅」の義。神事や法事に用いる餅は、白餅で、中に餡を入れないのが一般である。ヨイ^ニヌムチ [joinu-mutji] (祝い餅)には、バタ^ニムチ [batamutji] (餡餅)とかアガムチ [ʔagamutji] (赤餅)などが作られた。例、ソッコ^ニヌ ピンマー ツス^ニムチ ジブ^ニクナ イリ^ニティ^ニ マツ^ニォ^ニッタ [sokko:nu pimma: ssumutji dzibukuna ʔiriti matsotta] (焼香<法事>のときは白餅を重箱に入れて供えられた)

ゾーシキ^ニヌ・ニン^ニガイ [dzo:fikinu-niggai] (名)「雑色の願い」の義であろう。「村役人のために、祭事がスムーズにとり行なうことができるように祈願する」もの。^ニニ^ニガイ^ニの^ニ中^ニで^ニ祈^ニ願^ニさ^ニれる。「蔵人所に属する下級職員、下役人」に擬して「雑色」という語が使われたとすれば、かなり古い時代の祭儀を反映しているものとみられ、注意すべき祭祀といえることができる。農村の村役人を「雑色」と表現したハイカラなことばである。

ソー^ニチ [so:nitji] (名)「正日」の義か。ピン^ニガン [pigag] (彼岸)のように、1週間に及ぶ期間の中の、本当の彼岸の当日にあたる日をいう。ピン^ニガン・シキ [piggan-fiki] (彼岸の月)、ソー^ニラン・シキ [so:ran-fiki] (お盆月)に入って後の、本当の彼岸の日のこと。個人や各家の都合によって、彼岸だけは、その期間のいずれかの日に行つてよいと言われている。ピン^ニガン^ニマー シチ^ニヌ^ニサー^ニギ ペー^ニル^ニカ ソー^ニチ アラン^ニタン^ニティン シー^ニミ^ニサン^ニティ アザ^ニリ^ニブー^ニ [piggamma: fjtjinu-sa:gi pe:ruka: so:nitji ʔarantantin jimisan-ti ʔadzaribu:] (彼岸は、その期間にさえ入ったならば、正日でなくても、やってよいといわれている)。

ゾー^ニラ^ニキ [dzo:raki] (名)「常楽」の義か。特に豊年祭における西村と東村との競演芸能に対していう。豊年満作で、「ユートピアを希求する人々の芸能」の意であろう。例、プー^ニル^ニナー^ニヤ イン^ニヌ^ニム^ニラ アン^ニヌ^ニム^ニラ キッ^ニス シー^ニ ゴー^ニラ^ニキ ソー^ニッ^ニタ^ニヤ^ニ [puru-nar-ja ʔinnumura ʔannumura kissu ji: dzo:raki so:tta-ja:] (豊年祭には、西村、東村が競争してゾーラキをなさっよ、知っているでしょう)

ソー^ニラン [so:ran] (名)「精霊」の義。精霊会、お盆の意。旧暦7月13日(ンカイ・ビー

[²ɣkaibi:] ≪迎え日≫)、同14日(ナカヌ⁷・ピー [nakanu-pi:] ≪中の日≫)、同15日(ウクリヌ⁷・ピン [²ukurinupig] ≪送り日の日≫)の3日間にわたって行なわれる先祖供養の祭祀行事。鳩間島では、旧暦の7月をソーラン⁷・シキ [so:ran-siki] (精霊会の月)と称して、その月には神事に関する諸々の行事はタブーとされている。旧暦7月7日を、タナバタ [tanabata] と称し、その日には墓地を清掃したり、日頃から延び延びにしていた法事等を、ピュール [pju:ru] (日より。吉日)に関係なくとり行なうことが出来ることになっている。毎年廻ってくるソーランには、人々は「あの世」からの死者の御霊を各家に迎えて、孝養のかぎりを尽くすために「念仏歌」を歌うのである。祖霊は、目には定かには見え給わないが、あたかも眼前に祖霊がまします如くに語りかけたりして、心をこめて念仏歌を歌いあげるのである。

旧暦7月13日はンカイ⁷・ピー [²ɣkai-bi:] (お迎えの日で、朝から仏壇を清掃したり、供え物を飾りつけたりする準備を始める。イーパイ [²i:pai] (位牌)を洗ったり、コーロ [ko:ro] (香炉)の灰を取り替えたりする。供え物は普通、ソッコ⁷ムー [sokko:mu:] (「焼香物」の義か。線香3枚と、ウティン⁷ガビ [²utigabi] ≪打紙、紙銭≫3枚、米一合を重箱に入れたもの)、ムルムル [murumuru] (「諸々」の義か。甘蔗≪砂糖きび≫を7、8寸の長さにしたものを約10本程束ねて、⁷サンボー [sambo:] に乗せ、果物や木の実を差して飾ったもの一対)などである。それにサキ [saki] (酒)と、パナン⁷グミ [panangumi] (花米)を揃えて仏壇に供え、ンカイズ⁷シ [²ɣkai-dzu:si] (迎え雑炊)を供えると祖霊を迎える準備は完了する。祖霊を迎えるには、バラフ⁷タ [baraΦta] (稲藁)の穂の部分を曲げて丸めて縛り、その中にウキル [²ukiru] (燻)を入れてフチマ⁷ラ⁷シ [Φutjimarafi] (燻らせ)て、ペ⁷ラ⁷フチ [pe:raΦutji] (入口、門)の右脇に添えておく。これは人がその火を跨ぐことがないようにとの意味であるという。祖霊たちは、藁の煙りをたどって、家々に降りてくるといわれている。それで、藁の煙が、なるべくたくさん出るように心を配ったものである。祖霊が迎え入れられると、戸主を中心に、家族一同が仏壇の前に座り、跪いて合掌し、三日間、孝養を尽させて下さいと祈ってから会食した。分家筋の者も集まっめ会食した。その日の夕食は、できるだけ早めにとった。お盆の日、特に迎えの日は、腹が空いて、ひもじいと感じると、その人の魂が体(肉体)から抜けやすいと信じられていたからである。夕食がすむと人々は、ニンブ⁷ツァ⁷ [nimbutsa:] (念仏歌)を歌ったり、先祖の話をしたり、親戚を廻ったりして祖霊を慰める。夜の11時頃になるとユナカ⁷・シー⁷ムヌ [junaka:si:munu] (夜中の吸い物)を供えた。食事を供える際は必ずブ⁷ソー [burso:] (添え御飯)を、膳の外に置いて供えた。そして、これは女性しか食べることはできないといわれていた。お盆の三日間は、仏壇に線香の火が消えると、ピーリ⁷・ボール [piri-bo:ru] (冷えびえ)しているとして嫌った。そのために、線香の火を絶やさぬために、ピーマ⁷チカウ [pimatji-kau] (「日待ち香」の義か。

直径約5ミリ、長さ約25センチほどの大きな香。長時間を焚く際に用いる)を焚いた。

ナカヌ^ツ・ピン [nakanupig] (中の日)は、朝食にアサカイ [ʔasakai] (朝粥)を供える。午前10時頃に、サーサー^ツフキ [sa:sa:Φyuki] (お茶うけ)を供え、正午には、^アアシ [ʔaʃi] (「^ア朝飯」の義か。昼食のこと)、午後3時頃に、サーサー^ツフキ、午後6時頃に、ユーボン [ju:bog] (夕飯)を供え、夜中の午前零時頃に、ユナカシー^ツムヌを供える。こうして祖先供養をすることを、ソー^ツラン・マカナイ [so:ram-makanai] (精霊会賄い)と称している。中日の晩は、翌日のウクリ [ʔukuri] (送り)の焼香に必要な餅やアラシ^ツコーシ [ʔarafi:ko:ʃi] (「蒸し菓子」の義)を作るために、女たちが、クー^ツピキ [ku:piki] (約半日水につけた糯米を石臼で碾くこと)をして準備した。

男たちは、夕方になるとシー^ツシ・マーシ [[ʃi:ʃi:ma:ʃi] (獅子舞い)の準備をする。西村の獅子は「雌獅子」で大工家(ダイケー [daike:])が家元。東村のは「雄獅子」でク^ツメー [kume:] (小浜家)が家元である。シー^ツシ^ツヌ^ツ・キン [ʃi:ʃinukig] (獅子の着物)は、西村、東村の子供たちが、お盆の月に入ると同時に、バサ^ツヌ^ツ・カー [basanu-ka:] (芭蕉の皮)を剥いで槌で打ち、乾燥させておいた。それを使って獅子の着物を編みあげた。お盆の中日には、獅子元の人や村ヤクサたちが獅子頭の色を塗りかえて、獅子元の家が一番座の東縁に飾っておく。夕方になると村人が獅子元の家が集まってくるとシー^ツシ^ツ・マツ^ツリ [ʃi:ʃi:matsuri] (獅子祭り)をして、獅子舞いに移る。

ニ^ツブ^ツツ^ツァー (念仏歌)のシザ^ツヌ^ツ・ク^ツイ [ʃidzanu-kui] (兄の声)、ウシ^ツト^ツウ^ツヌ^ツ・ク^ツイ [ʔufjɪtunu-kui] (弟の声)、ンゾ^ツーニ^ツブ^ツツ^ツァー [ʔndzornimbutsa:] (無蔵念仏歌)が歌い終るころ、どこからともなく、アン^ツガ^ツマ [ʔaggama] (アンガマ踊りの一団。仮装変装集団)たちが、シー^ツシ^ツ パー^ツソ^ツーリ [ʃi:ʃi pa:so:ri] (獅子舞いをして下さい)と、裏声をつかって催足する。すると、^ツジ^ツーシ^ツン^ツカ [dʒi:ʃigka] (地謡衆)が中庭の筵に坐って、ム^ツヌ^ツン^ツグ^ツイ^ツ・ウ^ツタ [munuggui-uta] を歌う。歌の文句に合わせて、家の中から、筵を出し、火鉢を出し、煙管^{ウマツ}、煙草^{キシル}、煙草^{タバコ}、御酒^{ウミキ}、御馳走^{ウサイ}、す^ツない^{スナイ} (酔の物、なます)を出して、最後に、ブ^ツド^ツウル [buduru] (踊り)の出番となる。アンガマ踊りは、こうして始まるのである。アンガマたちは、仮装、仮装して、翁と媼に続いて出る。仏壇の正面からナカ^ツグ^ツス^ツク [nakagusyku] (ひんぷん)の側まで、片膝(左膝)を立て、腰をおろし、木の枝やクバ扇を持った両手を体の右側に流して待機している。地謡がニ^ツブ^ツツ^ツァー [nimbutsa:] (念仏歌)を謡い出すと、それに合わせて、片足を交互に上げ、両手をそれと反対側へ振り下ろしながら、ヒヤリクヨイサー サーと声をかけながら左回りに踊る。これが済むと獅子舞いに移り、モー^ツヤーを踊って、次の家へと移動する。移動する時は、ミ^ツチ^ツウ^ツタ [mitʃiuta] (道歌)を歌って移動する。夜明け近くまでかかって各家を回って祖霊を慰めたものである。

7月15日は、ウクリヌ^ツピン [ʔukurinu-pig] (送りの日)である。供え物は、中日のそ

れとは、同じであるが、正午の^アシ [ʔafi] (昼食) は、ピサシズー^アシ [pɪsajidzu:ʃi] (豚肉、魚肉、カマボコ、ニンジン、昆布などを刻んで炊いた雑炊。強雑炊) をそなえ、夕食には、カシ^アキ [kaʃiki] (糯米の御飯に小豆を混ぜて炊いた強飯) を供える。夜には、ユナカソ^アッコー [junaka-sokko:] (夜中焼香) をし、カビヤキ [kabijaki] (紙銭を焼くこと) もして祖霊を送るのである。ユナカソ^アッコーには、分家筋からもソ^アッコームを供える。家族全員が正装して焼香するが、その際、^アコーも定位置より下ろし、茶湯用茶碗も下ろして紙銭を焼く。焼き終えたら、グシ (酒) と茶をかけて火を消し、米を三つかみ入れて、^アパイ [pai] (拝) をする。そして供えた御馳走を箸でお初をおこし、拝をして終える。これが終ると、仏壇のムルムルから、供え物一切を下ろし、ムルムルの一部を籠に入れ、線香を抜き取って戸外に出、西の道路の側に置いて祈願し、祖霊たちを送るのである。かくてお盆行事は全過程終了するが、子供たちは籠を持って家々を回り、シン^アザ ^アコー^アソーリ [ʃindza ko:sori] (砂糖きびを恵んで下さい) と裏声をつかって、キビを集めた。シン^アザ ^アクイ^アプス [ʃindza kuipusu] (キビを乞ふ人) が来ると、家の中から外へ投げ与えた。これは餓鬼に対する施しであるといわれていた。

ソ^アラン・シキ [sorran-ʃiki] (名) 「精霊月」の義。お盆の行なわれる月間の意。神事に関する一切の行事はタブーとされ、神事について話すことすら忌み嫌われたものである。ソ^アラン・シキに入ると、ニンブ^アツァー [nimbutsa:] (念仏歌) を歌うことが許された。例、ソ^アラン・シキ ^アペ^アルカー ニンブ^アツァー イゾ^アラリ^アタン ツォ^ア [so:ran-ʃiki peruka: nimbutsa: ʔidzo:raritan tso:] (精霊会の月に入ると念仏歌は歌えたそうだ)。

ソ^アッコー [sokko:] (名) 「焼香」の義。祖霊を祭る法事のこと。タンカー・ソ^アッコー [taŋka:sokko:] (人の死後、一年目の同月同日にとり行なう法事。一周忌。ユヌ^アレー [junure:] ともいう)、サンニン^アキ [sanninʃiki] (三年忌)、シチニン^アキ [ʃitʃinʃiki] (七年忌)、ジュー^アサンニン^アキ [dʒu:sanninʃiki] (十三年忌)、ニジュー・グニン^アキ [nidʒu:guninʃiki] (二十五年忌)、サンジュー・サンニン^アキ [sandʒu:sanninʃiki] (三十三年忌) などがある。

ソ^アッコー^アム [sokko:mu] (名) 「焼香物」の義。法事などの際、親戚の者が供える一定の品物。普通、^アグシ [guʃi] (酒。約3合)、^アパナ [pana] (花米、約3合)、ツス^アムチ [ssu-mutʃi] (白餅、約7枚)、ウティン^アガビ [ʔutigabi] (紙銭、約5枚) ^アカウ [kau] (線香、板香3枚) などが供えられた。例、ソ^アッコー^アム シキ ^アマチティ^ア ^アカビン^ア ^アアビ^アオーシ [sokko:mu ʃiki matʃiti kabin ʔabi ʔo:ʃi] (焼香物を供えて、紙銭も炙って《焼いて》さしあげなさい)。

^アソ^アンガチ・パチニン^アガイ^ア [soggatʃi-patʃiniggai] (名) 正月初願。鳩間島の人々は、稲作に従事するために、西表島の北岸一帯へ、四五日泊り掛けで、マイ^アヌ・トゥ^ア [mainu-

tu:] (「前の渡」の義。鳩間水道。西表北岸と鳩間島の海峡) を渡った。その際に島人が事故に遭遇せぬよう、また風土病に罹らぬよう、健康と安全を祈願した祭祀である。ムトゥ [mutu] (「本」の義。本御願の義。友利お嶽のこと) で、ミジニー [midʒini:] (壬) の日を選んで行なわれた。ソングチ・パチニンガイヤー ムトゥナーティル ニンガイ オーツタ [soŋgatʃi-patʃiniggaija: mutuna:tiru niggai ʔotta] (正月初頭願いは友利お嶽で祈願された)

タキ・カウ [tʰaki-kau] (名)「竹香」の義。竹ひごで作った線香。イツァカウとともにウキナー・カウ [ʔukina:kau] (沖縄線香) ともいわれる。この竹香はコーロ (香炉) に立てやすい便利はあるが、竹の芯は燃えかすとして、香炉の砂の中に残るので、法事が済むと、この燃え残りの部分を取り出さなければならず、不便である。最近では、あまり利用されない。現在では、日常は、ヤマトウカウ (大和香) を使う。

タタリムヌ [tʰatari-munu] (名)「崇るもの」の義。主として成仏できないので浮遊している悪霊が、人間に災いをもたらすこと。例、カナー ヌビバ ガキ シネー プスヌ ヲ ブタンドウ ヲ ウヌ ヲ プスヌ ヲ タタリムンドウ アルツォー [kana: nubiba gaki ʃine: pʰsunu butandu ʔunu pʰsunu tʰatarimundu ʔaru-tso:] (あそこに首を吊って死んだ人がいたが、その人の崇りものがあるそうだ)。

タチ [tʰatʃi] (名)辰。十二支の第五番目。タチディ・プス [tʰatʃidi-pusu] (辰年生れの人)。タチディ・マリ [tʰatʃidi-mari] (辰年生れ)。例、ウレー ヲ タチ・ディプス ヲ ヤレーティ ヲ ル タチドゥーシ ビリティスマン ヲ ッサヌ [ʔure: tʰatʃidi-pʰsu jare:titu tʰatʃidu:ʃi biriti sumun ssanu] (その人は辰年生れの人だから、立ち通して仕事をして、坐ること≪坐って休むこと≫も知らない)

タナバタ [tanabata] (名)「七夕」の義。旧暦7月7日のこと。「たなばた祭」に祭る織女星の意味はない。その日には墓地を清掃したり、法事等、都合によって延期していたものを、ピュール [pju:ru] (日より) に関係なく、とり行なうことができた。鳩間では、法事の延期は何年でも構わないが、早めに切り詰めることは、不孝として嫌われた。ソッコーヤ ヌビヌ バラサー ナーヌ [so:kko:ja nubinu barasa: nanu] (焼香は延期して悪いことはない)。

タビヌウガン [tabinuugan] (名)「旅のお願い」の義。マイドゥムルウガン [maidumuruugan] (前泊お嶽) ともいう。戦前、旅に出る人はこのお嶽の前で手を合わせて旅立った。帰省の際にも、船上からこのお嶽に向かって礼拝した。出征兵士は、船を一時このお嶽の前で停船させ礼拝して出征して行った。鰹船が盛んだった頃、出漁の初めと終りには、このお嶽で祈願した。終りの祈願を、スピニンガイ [subiniggai] という。

トウイミヨ [tuimjo:] (名)「灯明」の義。神事の際に神前に供えて祈願する灯火。キザク [kidzaku] (ツキガイの仲間か。直径約8センチの貝。円形) の貝殻に菜種油を入れ、

木綿糸を10センチほどに切って燈心にしたもの。神事祈願の際、それに点火して燈した。
例、キザク^ノヌ ガラ^ノナ タニ^ノユー イリテイ トゥイ^ノミョー スコーロー^ノリ
[kidzaku-nu garana taniju: ʔiriti tuimjo: sʔuko:ro:ri] (キザク貝の殻に菜種油を入れて灯明を作って準備して下さい)

ドゥーパダ・ニガイ [du:pada-nigai] (名)「胴膚願」の義。家族の全員が一年間健康であるよう祈願する。ナー ピキピキヌ サカサ [na: piki-pikinu sakasa] (各ピキのお嶽の司) にお願ひして祈願をしてもらった。家長の生年(マリビー [maribi:]) の干支に合わせて家族全員の健康祈願をした。アツァ^ノヌ マリビー^ノナ ドゥーパダ・ニガイ シーオーサ^ノナー [ʔatsanu maribi:na du:padanigai ji: o:sana:] (明日の生れ日にドゥパダ願ひ)をしてさしあげようね)。

トゥニムトゥ [tunimutu] (名)「根元」の義か。鳩間島では、豊年祭の旗頭を保管しているアザテー [ʔadzate:] (東里家、ヨーカヤーの分家)とトゥムレー [tumure:] (友利家)をトゥニムトゥと称している。伝承によると、もともと西村のヨーカヤーの人がミジムトゥ [midzimumtu] (水源)の神(アラカー御嶽)を信仰して豊作続きとなったことから、同家に保管されていた雌雄の旗頭の中、雄の旗頭を東村の友利家の希望によって譲られた結果、村が豊年になったという。

トゥム^ノヤク [tumujaku] (名)「鱸權」の義。舵取のこと。舵取の用いる權は普通の權の約倍の大きさがある。幅約15センチ、長さ約150センチで、ずっしりと重い。これで船尾をはねたり、外側から内側へ漕ぎ寄せたりすることによって船の方向を変える。転じてその權を使う人に対してもいう。船頭のことである。操船に熟達した人がトゥム^ノヤク(船頭)になる。例、パーレー^ノヌ トゥム^ノヤコー ター^ノヤ [pare:nu tumujako: taja] (爬竜船の船頭は誰か)。

トゥラ [tura] (名)寅^{トツ}。十二支の第三番目。トゥラディプス [turadi-pusu] (寅年生れの人)。トゥラディ・マリ [turadi-mari] (寅年生れ)。トゥランパー [turampa:] (寅の方向。東北方)。例、トゥラディプスヌ^ノ ヨー キナイ^ノナー ミツァール^ノ スルーカ キナイヤ スー^ノヤン ツォー [turadi-pusunu jo: kinaina: mitsaru suru:ka kinaija su:jan tso:] (寅年生れの人が家内に三名揃うと、家内は強いそうだ。悪霊が来ないと信じられている)。

トゥラヌ・ズー [turanu-dzu:] (名)虎の尾。植物。和名、ヒロハチトセラン。羽状の葉に横縞があり、虎の尾に似ることから命名されたのであろう。鳩間島では、虎は魔除けとして神聖視されている。その家に寅年生れの人が三名揃うと、盤石の備えといわれている。寅年生れの人がいないう時は、好んで虎の掛軸を掛け、虎の刺繡を額縁に入れて掛け、虎尾を活けるようにした。例、トゥラヌ・ズーヤ^ノ カルイ^ノヌ ムヌ [turanu-dzu:ja karuinu munu] (虎尾は嘉例のものだ。縁起がよい)

トゥル [turu] (名) ^{トリ}酉。十二支の第十番目。トゥンディ・プス [tundi-pusu] (酉年生れの人)。トゥンディ・マリ [tundi-mari] (酉年生れ)。例、トゥンディ・プソー ワー
トゥルヌア アガキティ アザリ スコー パタラクンティ ダー [tundi-
puso: wa: turunu ʔagakiti ʔadzari sʔoko: paʔarakunti da:] (酉年生れの人は、君、
鶏の足搔きと言われるほど働くそうだよ)

ティジリビー [tidziribi:] (名) 「手摺り部」の義か。男で神職につく人。カンプス
[kampusu] (神人) ともいう。カンプスは上位概念であり、その下にサカサ [saka:sa] (神女) とティジリビー [tidziribi:] (手摺り部、男の神職) がある。各お願いにサカサを補佐する神職としておかれている。友利お嶽のティジリビは米盛富太郎氏、ピナイお嶽は加治工伊佐氏、アラカーお嶽は東里清光氏であった。

トーピン [to:piŋ] (名) 「当日」の義。祭祀の当日、祭祀本番の日の意。鳩間島の大きな神行事やその他の大きな祭祀は、ユードゥーシ (夜通し)、トーピン (当日、本番)、ブガリノーシ [bugarino:ʃi] (「疲れ直し」の義、直会のこと) の順でとり行なわれたという。特にサカサやティジリビーたちのブガリノーシは、カンアサビ [kan-asabi] (神遊び) と称して、神歌や、願い口の実習の場ともなったという。

ナカシザ [nakafidza] (名) 「中兄者」の義か。村の中堅に相当する人達を、若者の立場から言う時に用いる。40~50代の人たちをさす (特に男性に対していう)。この世代の人たちが、村の古老 (シザウヤ [ʃidzauja] ≪兄者親≫の義。親の世代に属する古老。70~80代の人たち) から、村の仕来たり、慣例、制度を習い覚えて、責任をもって、バカームンケン [baka:munkeŋ] (若者たち) を指導した。村行事の時は、このナカシザたちが厳しく若者たちを指導したので、若者たちから怖がられ、尊敬されていた。豊年祭の「棒踊」の時は、指導が特に厳格であった。例、プールナーヤ ナカシザンケヌ オー
リ イッケナ バウ ナラーソーッタン ダー [pu:runa:ja nakafidzaŋke:nu ʔori ʔikkenə bau nara:sottan da:] (豊年祭には、中年寄たちがいらっしゃって、棒踊りを、非常によく教えて下さったよ)。

カナユー [nakaju:] (名) 「^{なかよ}中世」の義か。ウーム・カシ [ʔu:mukaʃi] (大昔。始祖、鼻祖の世、世代) の次の世代をさしている。その家系の中で、中頃の世代をさしている。今の世代 (ego より3代上位までは、イマユー [ʔimaju] という) と鼻祖の、中間の世代。例、クンネーヤ ナカユー ナレーラル フノーララ クシオーツタ・ツォー [kunne:ja nakaju: nare:raru ʔuno:ra-ra kyʃio:ʃta-tso:] (この家は中世になって船浦から引き越してこられたそうだ)。

ナカンブレ [nakambure] (名) 「^{ナカモリ}中岡」の義。鳩間島は島の中央部に三つの岡が形成されており、その中の真中にある岡が「鳩間節」で有名な「中岡」である。昔はクバ [kuba] (蒲葵) が密生していたというが、明治37、38年頃の土地整理の際、測量のために伐採さ

れたという。その後、クバの植栽がなされたが、太平洋戦争中に再び伐採され、ヤシの高木が1本残された。敗戦後村人たちの手でクバの植栽がなされ、現在に至っている。

ナンカ [naŋka] (名)「七日」の義。死後、七日ごとに取り行なう法事。第一回を、アラ・ナンカ [ʔara-naŋka] (新七日) といい、順次、フタ・ナンカ [Φyta-naŋka] (二七日)、ミーナンカ [mi:naŋka] (三七日)、ユーナンカ [ju:naŋka] (四七日)、イチナンカ [ʔitʃinaŋka] (五七日)、ムーナンカ [mu:naŋka] (六七日)、ヲシズク [ʃindzuku] (四十九日) などがある。他に、ピャーカニチ [pja:kanitʃi] (百ケ日法事) もある。

ニョープトウキ [nijo:pytuki] (名) 石垣島の桃林寺の山門に安置されている「仁王像」のこと。鳩間島では、子供が幼児期に病弱な場合、石垣島の桃林寺の仁王像を拝ませて祈願をすると健康になると信じられていた。仁王像の法力によって、幼児にとり憑いている病気の神が抜られると信じられていたからである。例、ティラヌヲ ニョープトウキ ウガマヲシ クー [tiranu nijo:pytuki ʔugamaʃi ku:] (寺の仁王像を拝ませてこい)

ニエ [ni:] (名) 子。十二支の第一番目。ニエディ・プス [ni:di-pusu] (子年生れの人)、ニエディ・マリ [ni:di-mari] (子年生れ)、ニエヌ・パー [ni:nu-pa:] (子の方。北)、ニシカジ [niʃikadʒi] (「子風」・風の義か。北風のこと)。例、ニエディマリ ヲプソーイッケン ネーランコーロン ヲツォー [ni:dimari pusu: ʔikkeŋ ne:raŋko:n tso:] (子年生れの方は、たいへんねばり強いそうですよ)

ニシドーウガン [niʃido:ʔugaŋ] (名)「西堂御嶽」の義。中岡^{ナカモリ}の北西斜面に位置するお嶽。北東に向いた墓で、伝承によると、宮古島の方向に向いて作られているという。島の創建者が、宮古から与那国のウニトゥラ征伐に行く途中、鳩間島で休んで力をつけ、与那国征伐の帰りにこの島に残り、一生を終えたという。死後、ヲサヤンガタナ [sajagatana] (鞘刀) と盃が副葬品として埋葬されたという。明治期に入り、伝承に基づいて「お嶽」として建立された際、仲底家、鳩間家の方々によって墓が開けられたが、その時は、金の盃と刀剣があったという。そこで、村人と共にその盃で酒を酌み交わそうとした際、盃が音をたてて割れたので、人々は神意を感じ、それらをもとの場所にもどして墓も密閉し、神域として代々仲底家の血統による神司によって祭られて来たというが、墓の宝物は盗掘にあって今はないという (鳩間真吉氏伝承)。

ニガチ・ニョガイ [nigatʃi-nigai] (名)「二月願」の義。旧暦二月のミジニー [midʒini:] (壬) の日にとり行なわれる祭祀。この祭りには、(イ)ゾーシキヲヌ・ニョガイ [dzo:ʃikinu-nigai] (村役人のために、祭事がスムーズにとり行なえるように祈願するもの)、(ロ)アカカラジヌ・ニガイ [ʔakakaradzinu-nigai] (一般百姓のための祈願)、(ハ)イニ・アーヲヌ・ニガイ [ʔinia:nu-nigai] (「稲粟の願い」で、農作物の豊作を祈願するもの)、(ニ)アミ・ニョガイ [ʔaminigai] (雨願) の義。農作物のため、十日、十五日ごとの夜雨を祈願すること)、(ホ)マミヲヌ・ニガイ [maminu-nigai] (豆の願)、(ヘ)ミーヲシキ・パナシ

キヌ・ニガイ [mi:fjiki-panafjkinu-nigai] (流行病の祈願)、(ト)マイ・ムンヲヌ・ツサバーヲ
ヌ・ニガイ [mai-munnu-ssaba:nu-nigai] (米麦の草葉の祈願)、(チ)ムシヌニンヲガイ (害虫
の願い) などがとりおこなわれる。例、ニンガチニンガイヲヤー ウブニガイ ヤローヲ
レーティ マナヲマー ダイブヲ キサリヲル オーヲル [niggatjiniggaija: ʔubunigai
jaro:reti manama: daibu kjsariru ʔo:ru] (二月願いは、大きな祈願であるので、今
では大分切られて<省略されて>おられます)。

ニントウ [nintu] (名)「年頭」の義。年頭の挨拶のこと。年始。ニントウマーリ [nintu-
ma:ri] (年始まわり)、カミニンヲトウ [kaminintu] (神への年始)。元旦の朝、シディオミ
ジ [jidimidʒ] (「孵で水」の義。若水)で顔を洗い、家族全員がイチバンヲザー
[ʔitjibandza:] (一番座。床の間)に集まって、ザーヲトウク [dzatuku] (床の神前)に
供えてある、ヲグシ [guʃi] (神酒)とカラマース [karama:su] (力塩)を家長から頂き、
旧年中の神の加護に感謝し、新年度も神の加護のもと、健康で働くことができるようにと
いう祝詞を受ける。妻子も家長に対し返杯して、同様の祝詞を述べる。その後、フルマイ
[Φurumai] (振る舞い)の義。正月の御馳走)を頂く。祝詞の大略は次の通り。クトウ
シン ミードウシヲ ンカイオーラヲリ フコーラサ カンヌマイヲヌ マムリヲシッコウ
タ ウカヲギシ ヤーニンヲズ ヲドゥーパダ キンコーヲシ パタラカリタヲ ウカヲギ ヤ
ルタヲ シキンヲヌ カンヌヲマイニン シュカイトウヲ フコーラサヲ アジ ツサリヲ ニ
ガイ オーサバヲ クズ マサルヌ イートウシヲ ナラヲシミン タボーヲレーティ ケー
ラヲ ドゥーパダ キンコーヲ アラヲシ タボーヲレーティ エンヌ ユーヲ ンカイル
ユーヤヲ マサルヌ ユーヲ アラヲシ タボーヲローリ ダー [kʏtufim mi:duʃi
ʔŋkaio:rari Φʏko:rasa kannumainu mamurisjko:otta ʔukagifi ja:ninindzu du:pada
kiŋko:ʃi ʔaʔarakarita ʔukagi jaruta ʃjkinnu kannumainin sʃkaitu Φʏko:rasa
ʔadʒi ssari nigai ʔo:saba kudzu masarunu ʔi:tuʃi naraʃimin tabo:reti ke:ra
du:pada kiŋko: ʔaraʃi tabo:reti jennu ju: ʔŋkairu ju:ja masarunu ju: ʔaraʃi
tabo:ro:ri da:] (今年も新年を迎えることができてありがとう。神様がお守り下さったお
陰で家族一同、体も健康で働くことができたお陰であるから、神様にも、しかとお礼を申
し上げ、祈願申し上げるから、去年にまさる良い年になして下さって、皆、体も健康にな
して下さって、来る年、迎える年は、今年以上の年になして下さいよ)。

ニンプヲ・ツァー [nimbutsa:] (名)「念仏歌」の意。ソーヲランの時に歌われる歌で、沖縄
本島の念仏歌が八重山地方へ伝来したものであるといわれている。「念仏者」が原義で、
「彼らが歌う歌」の意に転訛し、今日のように「念仏歌」そのものだけを指すようになった
ものと考えられる。ムヌンヲガイ・ウタ [munuggui-uta] (物乞い歌)、シザヲヌ・クイ
[ʃidzanu-kui] (兄の声)、ウシイウヲヌ・クイ [ʔuʃitunu-kui] (弟の声)などは鳩間島に
伝承されている特徴的な念仏歌であるが、ンゾー・ニンプツァー [ʔndzo:nimbutsa:] (無

蔵念仏歌、《無常念仏歌》の義か)は、八重山地方一円に流布伝承されている(『沖縄文化』36・37号参照)。例、シザ¹マジマ ニールブンドゥ² ヲシザ³マナール⁴ ヲアル⁵ ダー⁶ [ʔndzo:nimbutsa:ja jo: ʃimadzima nirubundu ʃidzanu-kuitu ʔufitunu-kuija be:ʃimana:ru ʔaru da:] (無蔵念仏歌はねえ、鳥々似ているが、シザ¹マ²・クイ³《兄の声・歌》とウシト⁴マ⁵クイ⁶《弟の声・歌》は、我々《聞き手を含む》の鳥にがある《鳥にしかない》んだよ)。

ヌキムヌ [nukimunu] (名)「除け物」の義。魔除けのこと。ヤダン¹ブレ [jadambure] (和名、フシデサソリガイ、サソリガイ) ヤ²ギラ [gira] (しゃこ貝)は、形態的に女性性器に似ることから、魔除けとされている。ヲフル [Φuru] (豚舎便所)、ヲオンケ [ʔogke] (豚舎)に吊しておき、魔除けとした。例、ヤダン¹ブレ (ヤドゥン²バレーともいう) ヲサイティ³ ヌキムヌ⁴ シー [jadambure saiti nukimunu ʃi:] (ヤドゥンバレーを吊して魔除けとしなさい)

ヲパイ [pai] (名)「拝」の義か。神仏に祈願する際の礼拝の仕方。男女区別がある。神前で祈願する際、サカサは膝をついて前屈みに坐り、両手を胸の所で合掌して後、畳に軽く7回ほどたたき、それを5回ほど繰り返すような行動を続ける。ティジリビは、ひざまずいて合掌した後、立ち上って合掌一礼をする。これを3回ほど繰り返した後、立ったまま、両手を帯の位置で前方に出し、手首を上を振って、サカサの祈願が終るまで続ける。最後は、ひざまずいて合掌して終る方法であった。

パイディン [paidig] (名)「拝殿」の義。ウポーへ通ずる道の入り口にある小屋付きの門。コーロ(香炉)が据えてあり、男性はそこより内側へは入れないといわれている。

普通は、そこで香をたき、祈願を行なう。パイディン(拝殿)とウブヤー [ʔubuja:] (大家)の間の空間を、メー [me:] (広場、庭)という。キチゴン [kiʃigog] (結願祭)には、パイディンの前にサカサ(司)、ティジリ¹ビー、バキサカ²サ(脇司)らが坐り、左右の見物席には村人たちが蓆を敷いて坐り、ウブヤー(大家)の南側にバンコを作ってステージにし、ブドゥル・キョングン [buduru-kjogig] (踊り狂言)が奉納された。ウブヤーは、その際、楽屋の機能を果たした。余興はすべてウポーのある南の方に向けて上演され、西村と東村が合同でなされた。ヲジーシンカ(地謡い方)、ブドゥルシンカ [buduru-ʃigka] (踊り方)が、豊年祭のように対抗して競演することはなかった。

パカヤマ [pa:kajama] (名)「墓山」の義。ナカン¹ブレ [nakambure] (中岡)の西側にある岡で、福木、ガジマル(榕樹)、ヤラブ(テリハボク)、その他雑木が密生している森。岡の南斜面の砂岩を利用して、横穴式亀甲墓群がある。各家の本墓が約50基ほどある。十六日祭は、そこで行われた。パカヤマの頂上部に、ヲナーマヤーヌ ヤシ¹キ [na:maja:nu jaʃiki] (長間屋の屋敷跡)がある。約50センチほどの石垣の跡が残っている。

バキサカ^ツサ [bakisakasa] (名)「脇司」の義か。サカサ(司)の側で祈願に必要な道具類を揃えたり、コー^ツパナ [ko:pana] (線香や^{ハナヅミ}初米)の準備をしたり、アライパナ [ʔaraipana] (初米を洗って供えるもの)の準備をしたりする人で、サカサの脇で手を合わせ拝礼する。それぞれのピキ [piki] (ひき、血統)の中の^ツサーダカマリ [sardakamari] (セヂ高生れ)の女性がサカサの側で信仰した。

バキトゥリ^ツブン [bakituri-bug] (名)「別け取盆」の義か。神事の際、各お願(お嶽)の祈願に用いるクムチ [kumutji] (供物)一式を一つの細長い膳に盛って準備し、運搬したり、供えたりするのに用いるお膳のこと。幅約33センチ、高さ約6センチ、長さ約90センチで、イキパナ(活花)、アライパナ(洗い花米)、サードー(茶湯)、トゥイミョー(灯明)、ウツァナク(白餅)、ミキ(神酒)、クバン各一対などを入れておく膳。

バサン^ツパームチ [basampa:mutji] (名)芭蕉の葉餅。芭蕉の葉で包んで作った餅のこと。芭蕉の葉を、幅約20センチ、長さ約25センチに裂いて、それにデンブンを丸めて作った餅のたねを置き、その上に芭蕉の葉を幅約10センチ程の大きさに裂いたものに乗せて包み、蒸し煮して作ったもの。バサン^ツパームチュー カー^ツヤ パギヤ^ツサン [basampa:mutje: kajja pagijassaj] (芭蕉の葉餅は、皮は剥ぎ取りやすい)

ツバタムチ [batamutji] (名)「腹餅」の義。餅の中に餡を入れたものをいう。小豆の餡を入れたり、ユナ^ツク [junaku] (麦焦しと黒砂糖を混ぜたもの)を餡にしたり、または、米味噌を餡に入れたりしたものをバタムチと言った。祝儀には、赤、青のバタムチを作ったりした。例、^ツバタムチュー ンマ^ンツドゥ ナガタブイヤ^ツ ナラ^ツヌ [batamutje: ʔmma:ndu nagatabuija naranu] (餡餅はおいしいが、長く保存できない)

パチウクシ [paʧiukuʃi] (名)「初起こし」の義。初仕事。初荷。ソングチ・パチウクシ [songatji-paʧiukuʃi] (正月初おこし)といって、早朝から出漁して魚を釣ったり、畑へ出て野菜を採ったりした。午後は酒を飲んで1年の豊漁、豊作を予祝した。1年の仕事始めの意味がこめられている。

パチウクシ シン ギーティ ピーヌ^ツ クシェーラ ダイ^ツバン ホー^ツシケン [paʧiukuʃi ŋiŋ gi:ti pi:nu kyʃe:ra daibaj ho:ʃike:ŋ] (正月の初おこしをしに行つて、干瀬の外洋<鳩間島の北の海>から鰹の大判を釣ってきた)。

パチ^ツウク^ツスン [paʧi ʔukusun] (句)「お初をおこす」の義。法事の際、仏前に供えた御馳走を、パイ [pai] (拝)の後に箸で、お重の中から一つまみずつ引き出して、裏返しにしておくこと。これによって祖霊たちは供物を賞味されたことになるといわれており、その後、供え物を下げて家族が食べることになっている。^ツウサンダイ ウラ^ツシ^ツ ファイ^ツ [ʔusandai ʔuraʃi ffai] (供え物を下げおろして食べなさい)

パトゥ^ツマレー [paʧumare:] (名)「鳩離島」の義。paʧu-panari→paʧumare:と変化したもの。ホートゥバレー [ho:tubare:] (鳩離)ともいう。主に子供が用いる。西表島船浦湾の湾口

に位置する。干潮時にはピナイサキから歩いて潮干狩りに行くことができる。無数の野鳩が島のススキの上、下に巣をつくっており、岩の間にはウミネコがたくさん卵を産んでいた。昭和40年頃までは、故慶田城勇氏の個人所有の島であった。

パナ¹イキ [panaiki] (名) 花活。花器。仏壇や床の間に花木の枝を活けて供えるに用いる陶製の器。口は直径約5センチ、首が細く、胴まわりが大きい徳利型。両側に耳状の飾りがあり、正面には蓮花の透し彫りがある。イツァン¹パイ・キー [ʔitsampai:ki:] (ヒサカキの一種か。葉はゲッキツに似る) やパナギ [panagi] (「花木」の義、クロトン) の枝を、シキダ¹チ [ʃikidatʃi] (朔日)、ヅングニチ [dzuggunitʃi] (十五日) に供える。

パナ¹ギ [panagi] (名) 「花木」の義。普通は庭に植栽されているクロトンの枝を切って仏前に活けるのに用いる。イツァン¹パイ・キーは床の間の神前に活けるのに用いた。床の間の大きなパナ¹イキ [panaiki] (花活け) には、トゥラヌ・ズー [turanu:zɯ:] (虎尾) を活けるのを常とした。虎は魔除けとして尊崇され、掛軸にも好んで描かれた。虎尾も、それに因んで活花に用いられた。それに寅年生れの人が揃うと、盤石の備えといわれている。

パナ¹グミ [panaggumi] (名) 「花米」の義か。神事に用いる米。精米したもので、重箱に1合、2合、3合、5合と入れ、それぞれ、イチンゴ¹・パナ [ʔitʃiggo:pana] (一合花米)、ニンゴ¹・パナ [niggo:pana] (二合花米)、サンゴ¹・パナ [saggo:pana] (三合花米)、グンゴ¹・パナ [guggo:pana] (五合花米) と称した。例、パナ¹グミ スコーリ [panaggumi sykɔ:ri] (花米の準備をしなさい)

パマウリソー¹ジ [pamauri:so:dʒi] (名) 「浜下り精進」の義。旧暦3月の庚の日を選んで取り行われる。バタミチソー¹ジともいう。虫祓いの祈願。部落民が総出で¹サンシキ [sanʃiki] (栈敷) に集まり、村役人(ヤク¹サ [jakusa]) の指示に従って一斉に就寝し、村役人の鶏鳴の合図によって起きる。そこで御馳走を食べて帰宅するが、その間、友利御嶽では神司たちによって「稲の下葉の願」がなされる。これは、友利御嶽で他の四ヶ所の御嶽の分まで「ウトウ¹シ [ʔutu:ʃi] (お通し)」で祈願されるもので、イチ¹ヤマ [ʔitʃijama] (五ヶ所のお嶽) への祈願を各お嶽の方向へ向かって祈願されるものである。村ヤクサたちは手分けして、イダフニに分乗し、西表島のタータバ¹ル [tatabarɯ] (田原) へ行き、ユシキ¹ヌ・サン [juʃikinɯ:san] (ススキで作ったサン) を田圃の中に差して帰る。「浜下り精進」の三日前の夜、村ヤクサたちによって、「ツサレー」(知らせごと) が行われる。声色を使って、それが誰であると推定できないように「ツサレー」をいう。

真暗な闇の中から、「ツサレー ツサレー」という声が聞こえると、家の中の母親たちが、「オー [ʔo:] (はい)」と答える。親たちは、それを神の声として、慎しんで応答したものである。ややあって、戸外の闇の中から「アシ¹トー パマウリソー¹ジ アタリオー¹ツタ シキン¹ドゥ カマチヌー¹ラヌ¹ カキシ¹ジ ピナカンヌ マイ¹ヌ アガムノーマ¹ヌ カキン¹グ シー¹ タポー¹ロー¹リ」[ʔaʃito: pamaurisɔ:dʒi ʔatari ʔotta

fjkindu kamatʃinu maranu kəkiso:dʒi pinakannu mainu ʔagamuno:manu kəkingu
ji: tabo:ro:ri] (明後日は「浜下り精進」に当たっておりますので、竈の囲りの掃除、火の神の前の「赤もの」(火)の格護をよくよくして下さい) というと、家の中の者は「ウー」
 [ʔu:] (かしこまりました) と答えた。これを全戸に回って唱えたものである。唱え方が下手な人は、誰だということが分るので、「ツサレー」が帰った後、家の中は哄笑の渦となることがあった。それでも親たちは、「シーッ」といって子供たちを窘めた。昔は、パマウリソーヅジの日に、棧敷で、日頃の行動の悪い人や、女性で、グイフ・ゾーノ
 [guiφu-dzo:no:] (貢納布)の不合格になった者が、トゥンガ
 [tuŋga: ffa:sarotta] (「科をくわされた」。罰を与えられた)といわれている。

バラフタ・ピー [baraφuʔta-pi:] (名)「稲藁火」の義。お盆の初日の夕方、祖霊を各家に迎え入れるために焚く火の煙。門の西側の石垣に添えておく。稲束の穂の部分曲げて中央部で縛り、その中に燠を入れて燠らせ、煙ができるだけ多く出るようにしたもの。例、ウヤフソー バラフタ・ピーバ モーシティンカイオール [ʔujapʊso: baraφuʔta-pi:ba mo:jiti ʔgkaio:ru] (先祖の霊は、藁火を焚いて、お迎えなされるのだ)

パンガマイシ [paŋgamaiʃi] (名)「羽釜石」の義。パトゥマレー (鳩離島)の離れ岩で、羽釜の形に似た岩のこと。海中にあって、海水の侵食により、二重にノッチが形成されており、外見上、蓋をした羽釜に似るところから命名されたといわれている。上部にはユナキー [junaki:] (ゆうなの木)が生えていて、いたるところにウミネコの巣がある。繁殖期になると、岩のあちこちに卵を産んでおく。

バングバリ [baŋgubari] (名)「番配り」の義か。プログラムのこと。番組割りつけのこと。演目を決定すること。西村と東村が競争して上演したので、誰をどの演目に割り当てるかに苦心した。踊り手の中には、この踊りは誰とペアを組まなければ踊れないなどと要求する者も居たが、フジーシンカ (地謡)の長老が三味線に乗るか否かを踊らせながら現実に調整して決めていった。娘たちはバングバリに神経を使っていた。

ビー [bi:] (名)亥。十二支の第十二番目。ビーディ・プス [bi:di-pʊsu] (亥年生れの人)、ビーディ・マリ [bi:di-mari] (亥年生れ)。例、ビーディ・プソーメー ヲヌーティル
 アザリブタユー ツサンバンメー [bi:di-pʊso: me: nu:tiru ʔadzaributa
 ju: ssambam me:] (亥年生れの方は、もう、何とされていたか、わからないよ、もう)

ピーダマ [pi:dama] (名)「火玉」の義。①死者の魂が火の玉となって空中を飛んでいくと言われている。おにび。きつねび。人が死ぬとき、その人の家から、火玉が飛んでいくのが見えたという。②他人をののしるときにいう。火玉野郎。例、ウンネーラ ピーダマ
 ヌ トゥビフバリ ナーヌ [ʔunne:ra pi:damanu tubipari na:nu] (その家から火玉が飛んで行ってしまった)。

ピーマチ・カウ [pi:matʃi-kau] (名)「日待ち香」の義か。長時間香を焚くときに用いる。お盆の時は、三日間、仏壇に香を絶やさぬよう、この線香を焚いた。食事と食事の間に、1時間以上の間隔がある場合、この香を焚いて時間をつないだ。ユードゥー^ツシのときにも用いた。例、イー^ツヤ ピケー^ツチバ ピーマチカウ^ツ シキ タティ^ツリ [ʔija pʲiketʃiba pi:matʃi-kau ʃiki tatiri] (食事のお膳は引き下げたから日待香を焚いて立てななさい)。

ピキ [pʲiki] 「ひき (引き)」の義か。父方の血を引く集団、血族集団の意。^ツウガン [ʔugan] (お嶽) 信仰の場で、一定の御願のヤマニズとして信仰する人々を同一のピキに属するという。マガ^ツラピキ [magarapʲiki] と、インビ^ツキ [ʔimbiki] がある。例、プー^ツル^ツヌ ^ツピンマー ナー ピキピキヌ^ツ ^ツウガン オー^ツル [purunu pimma: na: piki-pʲikinu ʔugan ʔoru] (豊年祭の時は、銘々のピキの御願<<御嶽>>に行かれる)

ピチ [pʲitʃi] (名) 未^{ヒツ}。十二支の第八番目。ピチディ・プス [pʲitʃidi-pʊsu] (未年生れの人)。ピチディ・マリ [pʲitʃidi-mari] (未年生れ)。例、ピチディ・プソー^ツ イッケナー^ツ ウトゥナ^ツツサンティ ケ^ツラ ^ツムニーン ビーンナー^ツヌ [pʲitʃidi-puso: ʔikkenə ʔutun-assanti gera muni:m bi:n na:nu] (未年生れの人はいへんおとなしいよ、ほら見てごらん。問題もおこさないし、喧嘩もしないよ)

ビチル [bitʃiru] (名)「賓頭盧」の義か。屋敷の東側の庭に自然石を据え、マーニ [ma:ni] (黒枕^{くまく}椰子) やシトゥ^ツチ [ʃitʊtʃi] (蘇鉄)、パナ^ツギ [panagi] (クロトン) などを植栽して信仰の対象としている所。セジ高き所として、普段は人の立ち入りを禁じていた。子供も恐れて近寄らなかった。^ツウブシケー (大城家)、ヨー^ツカヤー (西原家)、クシケー (小底家) の屋敷の東側にあるビチルは、カンダカー^ツン [kandaka:ŋ] (神霊の高い) 所といわれている。

ピナイ^ツ・ウガン [pinai-ugan] (名)「鬚川嶽」とある。—『沖縄文化財調査報告書第70集』(沖縄県教育委員会)に、次のように記述されている。『琉球国由来記』記載の名称 ピナイ御嶽。所在地 字鳩間西村中。祭神 神名 フチコハラ。御イベ名 イリキヤニ。由来 「由来不^ツ相知^ツ」(『琉球国由来記』)。

対岸の西表島ピナイ集落では、地味が肥え、農作物が豊穡であった。この稔り豊かなピナイ集落の御嶽の香炉の灰を分けてもらい、鳩間島にウガンを建てようとしたが、ピナイ集落の人たちに拒否された。そこで夜、二隻の舟を出してピナイ集落に出かけ、香炉の灰を取り、ピナイ集落の人ちに気づかれぬように逃げ帰って、島に到着するやいなや、海岸端に香炉を設置し、線香を立てて祈願をした。これがピナイウガンである、という。二隻の船頭をつとめたそれぞれの家からサカサとティジリビーの神職が生まれている。豊年祭の爬竜船競漕(パーレー)は、このときの様子を演じたものだという伝承もある。—この記述はかなり正確に伝承を記録している。これに花城イガ氏(ピナイ^ツウガンの神司。

1970年当時、加治工伊佐氏（ピナイ^ウガンのティジリ^ヲビ。1989年1月23日、インクニガイ [ʔiŋkuniɡai] により正式に隠居）の直話を追加すると次の通り。前記、二隻の^ヲイダフニ [ʔida Φ uni] の船頭をつとめた者が、^{トゥ}ー^ヲゼー [tu:dze:]（通事家）とカザケー [kadzake:] の人であった。それで、サカサ [səkasa]（神司）は通事家の血を引く女性からマロー^ヲリ [maro:ri]（お生れになり）、ティジリ^ヲビ [tidʒiribi]（^{カシブス}神人）はカザケー [kadzake:]（加治工家）の血を引く男性の中からマロー^ヲルという。花城イガ氏は通事家の出身であり、同じく通事家出身であった、^ヲユーゼヌ アッパー [ju:dzenu ʔappa:]（松竹家のおばあさん）から神役を引き継いでいる。加治工伊佐氏は、加治工家の分家である、ユレーヌ^ヲ アブゼー [jurenu ʔabudze:]（寄合家のおじいさん）から神役を引き継いでいる。ピナイ^ヲ・ウガンには巨木が生えていた。特に^ヲウボー [ʔubo:]（威部）の所には、周囲約3メートルのヤラブ [jarabu]（てりはほく）の巨木が地面を這うようにして生えていたが、1960年代の大型台風の直撃を受け、幹から折れて枯れた。樹齢400年と推定されていた。現在のアラカー御嶽のそれより少し大きかったものと思われる。またパー^ヲレー [pare:]（爬竜船）の折り返えし点を示すウキ [ʔuki]（浮子）は、パ^ヲマレー [patumare:]（鳩離島）のパンガマイシ [paŋɡamaiʃi]（羽釜石）とピナサキ [pinasaki]（ピナイ崎）のマニ^ヲツァイシ [manitsaiʃi]（組石、グンカンイシとも）を目印にするといわれている。

ピナカン [pinakan]（名）「火の神」の義。竈の神様。竈の後に、3個の石をすえて、パ^ヲイキ [panaiki]（花活）に花木の枝をさして活け、コー^ヲロ [ko:ro]（香炉）を配して拝む。三個の石は、それぞれ、ヤマ^ヲイシ [jamaʃi]（山の石）、ヌー^ヲヌ・イシ [nu:nu-iʃi]（野の石）、カー^ヲラヌ・イシ [karanu-iʃi]（川の石）を当てるといわれている。スク^ヲマで刈り取った稲の初穂は、ピナカンに供えて、一年間、竈の奥に吊しておかれた。

ヲピニー [pini:]（名）「火の兄」の義。「火の弟」も含めていう。^{ヒノエ}丙。十干の第3日と第4日をいう。例、ムシヌ ニンガイ^ヲヤー ^ヲピニーバ アティル^ヲ ニン^ヲガイ オー^ヲル [muʃinu niggaija pini:ba ʔatiru niggai ʔoru]（虫の祈願は、丙の日をあてて、それを選んで祈願される）

ピャーシング [pja:ʃiŋɡu]（名）「火矢信号」の義か。大晦日の夕方から夜中にかけて、家々で子供たちが打ち鳴して遊んだ。^ヲシチ [ʃitʃi]（節祭）にも、シチフル^ヲマイ [ʃitʃi Φ urumai]（節祭の振る舞い）を戴く際に打ち鳴らした。この爆発音で邪気を払い、新年を迎える意味があるといわれている。ピャーシンゴー ナー^ヲラシェー^ヲティル フル^ヲマイヤ^ヲンコー^ヲツタ [pja:ʃiŋɡo: naraʃetiru Φ urumai-ja ʔŋko:tta]（爆竹を鳴して振る舞いは食べられた）。

ピュール [pju:ru]（名）「日選り」の義か。祭祀をとり行なう吉日を選り定めること。ピュール^ヲ クルン [pju:ru kuruŋ]（吉日を繰る。吉日を定める）、ピュール^ヲ トウル

ン [pju:ru turug] (吉日をとる) のように言う。例、ムヌシリヲヌ ヲヤーナ ギーティ
 ピュールヲ クラヲシク [munufirinu ja:na giti pju:ru kurafiku:] (物知り≪トゥキ
 ユヲタ≫の家に行って、吉日をとってもらってきなさい)

ピュールヲ・クルン [pju:ru-kurug] (句) 祭祀の吉日を定める。日選りをしてもらう。吉日
 を繰り定める。例、ヲアッパー ヲサンジュー・サンニンキヲヌ アタリブーヌンドゥ
 ピュールヲ クラヲシン パリユーサンヲツォー [ʔappa: sandʒu:sannigkinu ʔataribu:nundu
 pju:ru kurafim pariju:san-tso:] (おばあさんの三十三年忌に当たっているが、日選りをさ
 せに行くこともできないでいるよ)

ピンヲガン [piggaŋ] (名) 「彼岸」の義。春分、秋分ともにピンヲガンといい、その前後一週
 間をピンガンヲヌ・シチ [pigganu-ʃitʃi] (彼岸の節) という。春分や秋分の当日をソー
 ニヲチ [so:niʃi] (「正日」の義か) といい、一週間内であれば、ソーニチの日でなくても、
 ピンヲガンをすることができるといわれている。彼岸には、ピンヲガン・ズーシー
 [piggan-dzu:ʃi:] (「彼岸雑炊」といって、豚肉や魚肉を采の目に切ったものを混ぜて、人
 参や大根類も采の目に切って入れ、醤油で味付けし、御強風^{おこわ}に炊いたもの) が必需である。
 白餅一重箱 (ツスヲムチ [ssumutʃi])、ナマヲシ [namaʃi] (刺身) 一皿、イラキヲムン
 [ʔirakimug] (炊りもの) 一皿、ユーチング [ju:ʃingu] (四つ組の御馳走)、ヲグシ・パ
 ナ [guʃi-pana] (酒と初米)、それにウティンヲガビ [ʔutigga:bi] (「打ち紙」の義。紙銭の
 こと) を供えて祭った。親戚の仏壇へも、ヲグシパナとカウ (香) 三枚、ムチ (餅) 一皿
 を供えて祭った。紙銭は後生の通貨と考えられており、祖霊たちに金銭上の困難がかから
 ぬよう、それを焼いて送ると信じられている。カビヤキムヌ [kabijakimunu] (紙焼き物。
 通常、金盃の上に、芭蕉の葉の葉柄、バサヲヌ・ウディ [basanu-udi] というのを約1尺
 の長さに切り、ススキの生木で井字形に刺して置き、その上で焼く道具) の上で焼いた後、
 ヲグシ [guʃi] (酒) を一盃分注ぎ、アルコール分が青白く焼え、紙が完全に燃えたところ
 で、サーヲドー [sardo:] (茶湯) を二杯分注ぎ、火を消し、それにパナングミ
 [panangu:mi] (初米) を三掴み入れて終る。それが済むと供えた御馳走や餅などの一部
 分を裏返す。これをウクヲシ [ʔukuʃi] (おこし) という。これによって供え物は祖霊た
 ちに食されたと思われている。一種の儀式である。その後、ヲウサンダイ [ʔusandai]
 (供え物) を下げて、家族一同が会して頂くことができた。

ピンヲガン・ズーシー [piggan-dzu:ʃi:] (名) 「彼岸雑炊」の義。米飯に豚肉や魚肉を采の目に
 切って入れ、ヲビラ [bira] (菰) を刻んで混ぜ (人参や大根を采の目に切って入れること
 もある)。醤油で味付けした「おこわ」風の雑炊。五目飯のことをいう。通常は、コー
 ズーヲシ [ko:dzu:ʃi] (「強雑炊」の義か) といわれ、ソーラン [so:raŋ] (お盆) にも作ら
 れるが、彼岸に作られるそれが最も美味で、有名でもある。

ブーヲソー [bu:so:] (名) 「仏餉」の義か。添え御飯。仏前に供える正式の膳の外に、飯碗

に米飯を盛るように入れて供えたもの。これは、男性が食べることはできないといわれ、もっぱら女性が食べた。例、プーソーヤ ビキドゥモーツ ツファイヤナラヌティアザリプー [bu:so:ja bikidumo: ffaija naranuti ʔadzaribu:] (プーソーは、男は食べてはいけないと言われている)。

プーヌ・ソーゾジ [pu:nu-so:dʒi] (名)「穂の精進」の義。稲穂が出る際に害虫が付かぬよう、友利お嶽で祈願をする。その間、村ヤクサ [jakusa] (村の役人)たちがサバニで西表島に渡り、田圃にススキで作ったサン [saŋ] (ススキの葉を十字に結んだ呪具の一種)を差してくる。サンマー ヨーター パタキヌ カドローラ ミーパン ペーリティフケー ツスムティ アザリプー [samma: jo: ta: patakīnu kado:ra mi:pam pe:riti ŋyke: ssumuti ʔadzaribu:] (サンはねえ、田や畑の角から、三步内へ入ってから、茎を差すものだと言われている)。バラフタヌ サンマー ムスピティ スブルヌ パタナー シキルカー ウレーヌキムヌ ナルン [baraŋʔtanu samma: musubiti suburunu pātana: ŋkiruxa: ʔure: nukimunu naruŋ] (藁のサンは、十字に結んで頭の側に置くと、それは魔除となる)。

プーフル [pu:ru] (名)。豊年祭「穂利」の義とする説がある。①ユードゥーシ [ju:du:ʃi] (「夜通し」の義。夜をこめて祈願する日の意)、②トーピン [to:pig] (「当日」の義、ナカヌ・ピン [nakanu-pig] ≪中の日≫ともいう)、③シナピキ [ʃinapiki] (綱引き)の三日間にわたって行なわれる。昔の人々は、豊年祭をするために生きているんだと言われたという。島で最も盛大な祭りで、対岸の西表島あたりからも、昔からこの祭を見学するために傭船して来たものである。稲や粟等の収穫の後、神に対する感謝と来年の豊作を祈願する祭である。旧暦6月のミジニー [midʒini:] (壬)を選んで行なわれる。昔は、ムトウサカサ [mutusakasa] (友利お嶽の司)を中心にして、各お嶽のサカサやティジリビたちが集まってピュール [pju:ru] (日より) どりをして、それをスーダイ [su:dai] (「総代」の義。部落会長に当たる人)がブラクゾーカイ [buraku-dzo:kai] (部落常会)にかけてピュールを正式に決定した。サキピュール [saki-pju:ru] (先の日より。上旬の日より。)とアトピュール [ʔatu-pju:ru] (後の日より、下旬の日より)を神司の方々が用意して、稲穂のウーミ [ʔu:mi] (熟れること。成熟)の度合いを勘案して、部落常会で決定したのである。

豊年祭の日程が決まると、部落レベルでも、家庭レベルにおいても、それへむけての諸準備がなされた。サカサ(司)のアップパー [ʔappa:] (おばあさん)たちは、各自のウガン(お嶽)へ参拝し、プールの日程を報告し、掃除を始めた。各家庭では、プール・スコール [pu:ru-syko:ru] (豊年祭の準備)として、ムチマイ [mutʃimai] (糯米)を精白し始めた。庭の木陰でニブク [nibuku] (≪ニクブク、藁製の敷物。藁でカーペットのように編んだ敷物≫)を敷いて、イニピキ [ʔinipiki] (米摺、粳摺)をしたり、シキウシ

[f̄j̄kiūf̄ji] (搗臼) を並べて、二人一組、三人一組になって糯米を搗いて精米した。これがプール・シウカイパー [pu:ru-s̄j̄kaiba:] (豊年祭に使用する米) となる。プール・ムチ [pu:ru-mut̄f̄ji] (豊年祭の餅) に使う米のことである。豊年祭の一週間前になると、餅を包むバサンパー [basampa:] (芭蕉の葉) やサミノ・パー [saminu-pa:] (月桃の葉) を切りにウイバル [ʔuibāru] (上原) やウボードー [ʔuboda] (現在の住吉地区)、ニシトミジ [niʔimid̄zi] (住吉地区)、カーダ [ka:da] (住吉地区) あたりへ出かけた。部落では、スードアイ [su:dai] (総代、シマムチユームチともいう。) を中心に、ヤクサ [jakusa] (総代の下に、西村、東村に各二人選出された)、ザーアタル [dza:ataru] (座敷係、西、東各二人)、ジンバイ [d̄ʒimbai] (配膳係各二人) などが神行事の諸準備をした。

ヤクサたちはプールの四、五日前から、漁に出て魚やタコを獲り、カマポコを作ったり、ガシ・イズ [gaji-idzu] (薫製にした魚、クバンに用いる) にしたり、パリタク [paritaku] (張りたこ。タコの手を裂いて、日干しだこにしたもの) にしたりして準備した。刺身にする魚はユードウシの当日にとった魚を用いた。

ゾーラキ [dzo:raki] (奉納芸) の稽古はプールの二週間前あたりから始められる。西村は、ウブシケー (大城家)、ヨーカヤー (西原家)、アザテー (東里家)、パナシケー (花城家)、クシケー (小底家) あたりで棒踊りや、ゾーラキの練習がなされた。銅鑼を打ち笛をふき鳴らして、西村、東村が競争して練習した。練習風景を盗み見ようとしては、見張りの青年たちに追い返えされたりした。西村の棒踊り、特にルクサクパー (六尺棒)、サクパー (木刀踊り) などは、先輩方が厳しく技を指導した。東村のナギナタ棒は力強く、勇壮な棒踊りだったので、見劣りせぬよう、ガマクの入力方、腕のため方、力の入力方に特に注意をして指導した。昼は田畑の仕事と鰹業に従事し、夜は遅くまで、銅鑼や笛の音を鳴らして、村は最高に活気づいていた。ゾーラキや棒踊りがバングバリ [bangu-bari] (「番組割り」の義か。プログラムのこと) 通りに仕上がっているかどうかを確認するため、トピン (当日) の二、三日前に、スクミ [sykumi] (「仕組み」の義か。リハーサルのこと) をして手直しをし、満を持して当日を迎えた。その間、西村、東村双方とも、偵察を送って相手方の技を研究しあったことは勿論である。グサークマイ [gusa:kumai] (五勺米) はユードウシの前日、ヤクサ (二人)、ザーアタル (二人) らによって各戸から一人当たり白米が五勺ずつ集められた。これは、フダニン [ʔudaniŋ] (十五歳以上の男女、納税者の意) の頭数に割当てられて徴収された。中には、フダニンに達しない人の分まで納入する人もあった。昔は、グシパナのグシ [guʃi] (神酒) やコーパナ [ko:pana] のカウ [kau] (線香) も集められた。集められたグサークマイは友利御嶽のサカサの家が一番座に集められ、ヤクサたちによってイチ・ヤマ [ʔit̄ji-jama] (五つのお嶽、友利御嶽、ピナイ御嶽、西堂御嶽、新川御嶽、前泊御嶽) に等分に配分される。

その間サカサは一番座で正座している。作業が完了した後、友利御嶽の五勺米を入れたフイバ [Φuiba] (真茅で作った穀類入れ) にだけは、バラツザン [baradzag] (藁算、五勺米の数量を示したもの)、明細書が置かれ、他のお嶽の分は袋に入れられる。五勺米が神前に並べられると、酒と肴の膳が出され、ヤクサによって五勺米の明細書が読みあげられる。サカサによるお礼のことばがあって後、ヤクサによって豊年祭が滞りなく行なわれるよう、お願いのことばが交わされる。その後に各御嶽のサカサの家へ同様な形式で五勺米が届けられる。

かくて諸準備は順調に進行し、村ヤクサの家で、ユードゥーシに使う円形のツムチ [ssumutʃi] (白餅) を作ってユードゥーシを迎えた。ユードゥーシ [ju:du:ʃi] (「夜通し」の義。夜を徹して神に祈願する祭事のことである) は、友利御嶽でサカサとティジリツビが各家から集めたパナンツグミ [panagumi] (初米) を神前に供え、ポーツァー [po:tsa:] (包丁係) らによって作られたウサイ [ʔusai] (「お菜」義か。御馳走のこと)、バキサカサ [bakisakasa] (脇サカサ) によって盛りつけられたクームチ [ku:mutʃi] (「供物」の義か。供え物) 類を、バキトゥリツブン [bakituribug] (供物を盛る長方形の盆、供物類を一式盛って持ち運ぶお膳) に入れて供え、ユネンツヌ・パイ [junennu-pai] (夕方の拝、祈願)、ユナカツヌ・パイ [junakanu-pai] (夜中の拝、祈願)、シトゥムティツヌ・パイ [ʃitumutinu-pai] (朝の拝、祈願) 三回の祈願を夜を徹して行なうのである。ユネンツヌ・パイ、ユナカツヌ・パイ、シトゥムティツヌ・パイの間には、ユードゥーシに参加した村の有志たちとサカサやティジリビたちが三味線、笛、大鼓を鳴らして歌舞をし、神を歓待するが、ユードゥーシが終った早朝サカサを先頭に、ティジリビたちが、ミルクヌ・ウタ [mirukunu-ʔuta] を歌って友利御嶽より下りて来る。ミルクンツヤー [mirukun-ja:] (彌勒を保管している家) の所まで来て解散し、各家庭に帰り、ツトーピン [to:piŋ] (当日) の神行事に移っていく。

ツトーピンの午前10時頃、サカサやティジリビ、バキサカサたちがグサークツマイ (五勺米)、パナンツグミを、各ピキのお嶽へ持参して祈願する。その際、各家からサカサの家へ献上されたカサンツパー・ムチ [kʌsampa:mutʃi] (芭蕉の葉で包んだ餅を5枚か7枚1束にして献上されたもの。プールツムチともいう) の中から数枚ほど持参して供える。丁度この時間帯に、友利御嶽では、ヤーバン・ニガイ [ja:ban-nigai] (「八番願」の義か) が祈願される。

各御嶽では、サカサやティジリビ、ピキの者たちが各御嶽のプールツムチ [puru-uta] (豊年祭の歌) を謡い、その後時間を見計らってから友利御嶽へ行く。全員が揃うと、友利御嶽の拝殿に向かって合掌し、カンシバ [kanʃiba] (「神芝」の義か。マーニの葉) を頭に結び、ミチウタ [mitʃiuta] (道歌) を歌いながらサンシキへ向う。サンシキでは、スーツダイ [su:dai] (総代) や村ヤクサたちがサカサやティジリツビーの一行を迎え、ツサンシ

キヌウタ [sanʃikinū-uta] (棧敷の歌) を謡って所定の座につく。これを合図に、西村と東村の旗頭がアイヅムトゥ [ʔai-dzamuʔu] (合流点) で合流して棧敷へ入場する。カシラ (旗頭) はトゥニムトゥ が出る時から、ボーウティ・シンヅカ [bo:uti-ʃiŋka] (棒踊りする人)、ゾーラキシカ [dzo:raki-ʃiŋka] (踊りをする人) たちが、メーカーッパをし、出演するコスチュームに身をつつみ、隊列を組んで、笛、太鼓、銅鑼を打ち鳴らし、かけ声をかけながら氣勢を上げてアイヅムトゥで合流し、サンシキへ入場する。カシラはサンシキの正面定位置に二本のポールを立てて、それに結えておく。ゾーラキやボー踊りは東村、西村で競演されるが、東村と西村の交替の際に、カシラを一旦サンシキの入口まで戻して、再入場させる。競演が終ると、最後にパーレー [pa:re:] (爬竜船競漕) が行なわれる。

ゾーラキの最終演目が終ると同時に、笛が一段と高く吹き鳴らされると、ドラが強打され、カシラ持ちが旗頭を持ち上げ、棒踊りの曲に合わせながら、東回りでサンシキの浜にカシラを移動させる。浜には二本のポールが立っており、カシラをそれに結えて立てておく。ポールの前には、東と西のパーレーフニ [pa:re:·Φuni] (爬竜船) が並べてある。サカサたちが所定の座に着かれると、二隻のパーレーフニは、手で下げ持つようにして勢いよく海に浮かべられ、漕ぎ手達が乗る。一担漕ぎ手が乗って、船を揃えてから、「ユーアギ・ジラマ [ju:agi-dʒirama] (世揚げジラバ、世乞いジラバ) を歌い、ゆっくりと船を漕ぎ回して船を揃え、出発の合図のドラの音によってスタートを切る。折り返し点のブイは、約500メートル沖に、白旗を立てて浮けてある。この方向も棧敷から鳩離島のパンガマイシ [paŋgama-iʃi] (羽釜石) と、ピナイサキ [pinaisaki] (ピナイ崎) のマニツァイシ [manitsaiʃi] (俎板石) に合わせるといわれている。このブイの白旗を回わる際、トゥムヅク [tumuʒaku] (「艦權」の義、船頭、舵とり) が、權で白旗を倒すことになっている。こうしてゴールインすると、イチバンヅク [ʔitʃiban-ʒaku] (一番漕手) が船から飛び降りて、サカサの前に跪き、神酒をいただく。その間、浜では老若男女、ドラや太鼓を乱打して、ガーリ [ga:ri] (「自慢合戦」の義か。応援) をする。これが済むと、「ユーアギジマ」と、「パイミジラマ」を漕ぎ手と応援団の人々が一緒に歌い、カシラを先頭にして棧敷へ戻る。そしてそこから東西のトゥニムトゥへと分かれていく。棧敷では、ヅサンシキヌ・ウタ (棧敷の歌) を歌い、それからアイヅムトゥへ戻って分れの歌、アイヅムトゥ・ウタ (迎え所、合流点の歌) を歌って、それぞれのトゥニムトゥへ帰る。トゥニムトゥでは、トゥムニトゥヌヅク・ウタ [tunimutunu-uta] (根元家の歌) とサンバーレ [samba:re] が歌われ、儀式を終える。一方、漕手たちは、パーレー [pa:re:] (爬竜舟) の船元家に集まり、フナムトゥ [Φunamuʔu] を歌ってトーピンの儀式をすべて終了する。

プールの三日目は、シナヅピキ [ʃinaʔipiki] (綱引き) である。綱引きの当日、午前中、サカサ、ティジリビ、バキサカサはウガンに行き、祈願をして帰りに友利御嶽のサカサの

家で歌や三味線で神遊びをし、待機する。

一方、青年たちは午前中より、網の準備や旗頭の準備をする。網は各戸から徴収した稲藁を使って、縄を編み、大綱を作るのに用いる。カシラも伝統的なものと異なり、綱引きの日のカシラはデザインも、形も毎年工夫された。鯉船の工場からは、鯉を形どったものなども出された。

午後3時頃からサンシキにおいて、サカサ、ティジリピーらが所定の座につき、村の有志たちも所定の座に坐ると、ドラの早打ちが始まり、それを合図に「ヒーヤユイサ」の掛声があがり、東村、西村入り乱れて乱舞する。巻踊りのように、ひとしきり乱舞があって、ドラの合図で旗頭が東西に分かれたのち、婦人たちによるイジックナー [ʔidzikkuna:] (言い競い、口合戦)が始まる。一種の「土地誉め」で、東村、西村の婦人たちが向かい合って、村の自慢話を単調な曲にのせて謡いはやす。前列の2人は剣を持ち、後の4名は小太鼓を持って打ち鳴らす。その後には合唱隊が並び、弊帛のような紙製の巾を手を持って、曲に合わせて、体を前後にゆすりながら、両手を打ちおろしたり、戻したりする動作をくりかえす。前列の女性は両手で剣を小さく振りながら東西から5、6歩前へ進み寄って、刃と刃を切り結び、くると向きを変えて原隊へ戻る動作を繰り返す。このようにして、イジックナー [ʔidzikkuna:] が終ると、次にガーリ・ウタ [gari-uta] (「招き歌」の義が、歌われ、シナㄱピキ [ʃinapiki] (綱引き)に移る。綱引きは、一回と二回は簡単に、ウオーミングアップをして引かれた後、本番に移る。本番は、先ずシナヌㄱ・ミン [ʃinanu-mig] (「綱の耳」の義か。雄綱と雌綱を合わせる所)を寄せることから始まる。西村からは戸板に乗った女性が鎌を持って身構え、男たちに担がれてゆっくり進んでくる。東村からは、男性が長刀を持って身構え、戸板に乗ってドラの音に合わせながらゆっくりと進んで来る。東西の綱が合体した所まで進むと、構えを双方とも解き、東村からは五穀の籠を渡し、西村からは、それを受けて神酒を手渡す。この儀式が済むと西村の女性は、鎌と鎌の刃を打ち鳴らして再び身構え、東村の男性も長刀を斜め下に身構えて急いで退いていく。そして本番の綱引きがなされる。綱引の本番では、サカサやティジリビも参加する。東村が人口も多く、強力ではあるが、大綱は一担は東へ引かせても、最終的には西村の方へ引き寄せ、世果報を予祝するのが習わしである。これはパーレーも同様で、パーレーでは儀式歌の中に、構造的に西村が漕ぎ勝つ仕組みになっていることを、大城学氏が発見している。西村(女性を象徴)優勢が豊年を予祝すると信仰されている(『鳩間誌』所収の大城学論文参照)。

プール・シウカイㄱバー [pu:ru-si:kaiba] (名)「豊年祭に使用する米」の意。ムチマイ [mutʃimai] (糯米)は、プールㄱムチ [pu:rumutʃi] (豊年祭)の餅)を作るため、サクㄱマイ [sakumai] (粳米)は日常生活用として、豊年祭の1週間前から準備された。庭の木陰で、磨り白や搗き白を並べて、女たちが精米した。プール・シウカイㄱバー ムチマ

イ ルクトゥブカラ ツサウバル ナル [pu:ru-sj̄kaiba: mutʃimai rukutubukara ssaubaru naru] (豊年祭用の米は、糯米6斗ほど精米しないとけない)。

プーラムチ [purumutʃi] (名) 豊年祭の餅。芭蕉の葉に包んで、5枚、7枚、13枚と束ねて蒸し煮する。普通、糯米を碾いてツシトゥ [ʃj̄tu] (でんぷん) を作り、それを直径約3センチ、長さ約8センチの円柱状にこねて芭蕉の葉に包んで蒸すと出来あがる。バサンパー・ムチ [basampar-mutʃi] (芭蕉の葉餅) と、サミノパー・ムチ [saminupa-mutʃi] (月桃の葉で包んだ餅) の二種がある。月桃の葉には芳香があるから、それで包んだ餅も美味である。

ブガリ・ノーツシ [bugari-no:ʃi] (名) (「疲れ直し」の義。直会のこと)。ブガリ・ノーツシは、神行事の時だけでなく、農耕(田植え、稲刈、畑の荒打ち等)やツバコー [bako:] (共同作業)の後などにも行なわれた。神行事の後に行なわれるのは、サカサやティジリビーなどと、スーダイヤクサたちが一緒に慰労会をしたが、昔はサカサやティジリビーたちがカン・アサツビ [kan-asabi] (神遊び) と称して、「疲れ直し」をしたという。

ツフカヤー [ʃukaja:] (名) 「外の家」の義。墓のこと。歌謡語。念仏歌に現われることば。日常会話では用いない。ウシトゥツヌ・クイ [ʃj̄tunu-kui] (弟の声<歌>) に、「ヌクターサーミジヤ クバスユカ フカヤーヌ ソーロ ソーロヌ タミドゥナル…略」(残った茶水<茶湯>は、こぼすから、外屋<墓の、霊界の>の、精霊<祖霊たち>のためになる)と歌われている。

フダマルン [ʃudamaruŋ] (動) 神仏の霊が憑依して、神仏の意を告げる。ツサーダカマリ [sa:daka-mari] (セジ高生まれ) の人に神仏の霊が乗り移って、失神状態となり、その後神仏の意志を語り出すことをいう。例、ツサーダカマリヌ プスヌツ フダマリティウツネヌ キナイヤツ シジ タダツソーッタ [sa:dakamarinu pʃunu ʃudamariti ʃunnenu kinaija ʃidʒi tadaso:tta] (セジ高く生れた人が憑依して、その家の血筋を正された)。

プトウツキ [pʃutuki] (名) 「仏」の義。仏様、仏像のこと。石垣島の桃林寺の山門に、ツニヨープトゥキ [nijo:pʃutuki] (仁王仏像) が安置されている。友利御嶽に安置されている仏像にも、プトウツキ(仏)と称している。どういう訳か、御嶽に仏像が安置されている。例、ウイヌツウガンナー プトゥキツヌ マツァリオールツヌ ツヌンティカヤー [ʃuinu ʃuganna pʃutukinu matsario:runu nuntikaja:] (友利御願に仏様が祭られるが、なぜかなあ)

フナツダタ [ʃunadama] (名) 船霊。女性の髪を神体として祭ってあるもの。船室の中央に神棚を作って安置し、酒をコップに入れて出漁前に祈願した。漁船などには、女性を乗せないだけでなく、出漁のため、船員が早朝家を出て船に向う途中、女性に外うことは縁起が悪いとして嫌われた。例、フナツダマー ミドゥツム キライオーツルン [ʃunadama:

midunu kiraio:rug] (船霊様は、女性を嫌いなされる)

フナ⁷バルウガ⁷ [Φunabaruugaj] (名)「船原お願」の義。伝承によると、鳩間村創建の際、古見から分村してきた人たちが最初に上陸した所がフナ⁷バル・パマ [Φunabarupama] (船原浜)で、そこから友利御嶽の所へ登り、村の根拠地を作ったという。その道跡がカン⁷ヌ・ミチ [kannu-mitji] (神の道)であるという(鳩間真吉氏伝承)。フナバル浜に下りる道の側のクバ [kuba] (蒲葵)やマーニ [ma:ni] (黒枕椰子)の密生する中に拝所がある。コーロ [ko:ro] (香炉)が設置されているだけで、サカサ [saka:sa] (司)もティジリ⁷ビ [tidgiribi] (男の神人)も今はない。1960年頃までは、鳩間真吉氏がカン⁷プス [kampusu] (神人)として勤めておられた。フナ⁷バロー ヨー⁷ イッケナ カンダカー⁷ン トンティ ダー [Φuna-baro: jo: ʔikkena kandakan tonti da:] (船原はねえ、大変神高い所だそうだよ)。

フナム⁷トウ [Φunamutu] (名)「船元」の義。パーレー [pare:] (爬竜船)に選ばれた船の船主のこと。鳩間島では、村のパーレー⁷フニ [pare:Φuni] (爬竜船)を特別に造らなかった。各家に⁷イダフニ (板舟、サバニ)があるから、毎年、西村と東村で別々に船を漕ぎ試して、船足の早いものを選んで、パーレー⁷フニと決めていた。パーレーの後、パーレーシンカ (漕手)たちはフナム⁷トウ (船主)の家に集まって歌をうたって、酒食を振舞われて、来年の豊年を祈った。

フルマイ [Φurumai] (名)「振る舞い」の義。ソングチ・フルマイ [songatji-Φurumai] (正月の振る舞い。正月の御馳走)、シチ・フル⁷マイ [ʃitji-Φurumai] (節祭の振る舞い)などがある。正月は、トゥシヌ⁷ユー [tuʃinu:ju:] (大晦日)の夕方に、ピーシング [pja:ʃingu] (「火矢信号」の義か。爆竹のこと)を打ち鳴らしながら振る舞いを食べた。トゥシワシ⁷リ [tuʃiwafiri] (年忘れ)という考えは、言葉と共に沖縄から入ってきたものであろう。

フン⁷シ [Φunʃi] (名)風水。屋敷などが、地勢や水勢を占った後、その地に適するか否かを決める思想。風水思想に基づく土地の運勢。墓地を選定する際にも用いる。クヌ⁷ヤシ⁷ケーヨー イッケナ フン⁷シ カイ⁷ヤ ベー⁷ティ マリサカリヌ⁷ アンツォー [kunu jaʃike:jo: ʔikkena Φunʃi kaija beti marisakarinu ʔantso:] (この屋敷はねえ、大変、風水がよいので子孫繁盛があるそうだ)。

ポー⁷ツァー [po:tsa:] (名)「包丁人」の義。キチゴン [kiʃigon] (結願祭)のとき、友利御嶽のポー⁷ツァー⁷ヤー [po:tsa:ja:] (包丁人小屋)で、祭の祈願に供える、⁷ウサイ (お菜、御馳走)や、⁷クバン [kubaj] を作ったり、盛りつけたりする係。供物の数や種類を熟知して、バキサカ⁷サやサカサの方たちと連絡しあいながら作業を進めることのできる人が当たった。例、カザケヌ⁷ マツォーザール ムカ⁷シェーラ ポー⁷ツァー シーオー⁷ル [kadzakenu matsodza:ru mukaferra po:tsa: ʃi:oru] (加治工実氏が昔から包

丁係をしていらっしゃる)

マラスン [ma:rasuŋ] (動)「死ぬ」の敬語。亡くなる。マラスヌ (亡くならない) マーラシティ (亡くなって)、マーラシタン (亡くなった)、マラス^カカー (亡くなったら)。
例、^アブ^ヂエー マーラシティ^ア ^アトゥ^ナール ^アッ^パー マーラ^ソー^レヨ^ー
[ʔabudʒe: ma:raʃiti ʔatuna:ru ʔappa: ma:rasore: jo:] (おじいさんが亡くなって後に、おばあさんは亡くなられたんだよ)

マガ^ラ・ピキ [magara-piki] (名) 父方の血縁関係。この血縁関係にある者は、法事の場合、ナンカ [naŋka] (七日ごに行なう法事)、ソ^ッコ^ー [so:ko:] (一周忌から三十三年忌までの法事、焼香の義)などで、パ^ナン^グミ [panaŋgumi] (ニ^ンゴ^ハナ^ング^ミ、^ニ合^ハ花^ナ米)、^グシ [guʃi] (酒、一^爛壇)、ウ^ティン^グガ^ビ [ʔutiŋgabi] (打^チ紙、3枚)、カウ [kau] (線香、1束)を供物として供えなければならないといわれている。

マジムヌ [madʒimunu] (名) ①「蠱物」の義。魔物、化物、精。幽霊。人間をまどわすもの。②他人に対して口ぎたなくののしる場合にも用いる。①ヤ^ラビ^ヲヌ ユ^ナカ ミ^チエ^ヲ ^ンジ^ルカ^ー マ^ジム^ン ^マヤ^ーサ^リン [ja:rabinu junaka mitʃe: ʔndʒiruka: madʒimum maja:sariŋ] (子供が夜中に道へ出ると蠱物に迷わされるぞ)。②マ^ジム^ノウ^ンザ ^コー^サ ^ツフ^ァー^サリ^ンダ^ー [madʒimuno: ʔundza ko:sa: ffa:sarinda:] (蠱物めが、げんこつをくわすぞ)

マ^ニツ^ァイ^シ [manitsaiʃi] (名)「俎石」の義。グ^ンカ^ンイ^シ [guŋkan-iʃi] (軍艦石)ともいう。ピ^ナサ^キ [pinasaki] (ひない崎)に、軍艦の形をした大きな岩が海中にある。古老たちは、それをマ^ニツ^ァイ^シといわれたが、太平洋戦争後、グ^ンカ^ンイ^シの名が通用するようになっている。鳩^離島の^パン^ガマイ^シ (羽釜石)と対なして、神話的生活空間世界を形成するものと考えられる。ム^カツ^ピソ^ー マ^ニツ^ァイ^シテ^ィル ^アゾ^ーツ^タ ^ムカ^フィ^ソ ^マニ^ツァ^イシ^ティ^ル ^アゾ^ーツ^タ ^ムカ^フィ^ソ ^マニ^ツァ^イシ^ティ^ル ^アゾ^ーツ^タ [mukaʃi-pyso: manitsaifitiru ʔadza:tta] (昔の人は俎石といわれた)。

マ^ミヲ^ヌ・ニ^ガイ [maninu-nigai] (名) 豆の祈願。ニ^ンガ^チ・ニ^ンヲ^ガイ (二月願い)の際に祈願される。ヤ^ーバ^ン [ja:bəŋ] (「八番」の義か。八回祈願すること)の願いごとの一つ。ア^ガマ^ミ [ʔagamami] (小豆) ヤ^クマ^ミ [kumami] (緑豆)、ト^ーフ^マミ [to:Φu-mami] (豆腐豆)が実るように祈願すること。その祈願。例、ク^トウ^シエ^ー ^マミ^ヲヌ[・]ニ^ガイ ^ソー^ルン[・]カ^ヤ ^クト^ウシ^エ ^マミ^ヲヌ[・]ニ^ガイ ^ソー^ルン[・]カ^ヤ [kutuʃe: maminu-nigai so:ruŋ-kaja:] (今年は豆の願いをなさるかねえ)

マ^リビ^ー [maribi:] (名)「生まれ日」の義。生誕の日のこと。生年月日を干支で表したものの。人のマリビ^ーは、運勢上、注意を要する日として大切に扱われた。困難な仕事を始める時、家作り、墓作りなどは、マリビ^ーを外すように心がけていた。例、マ^リビ^ーヤ^ッケ^ナ ^スー^ワン ^ツォ^ー [maribi:ja ʔikkenā su:wan-tso:] (生れ日は、運勢上非常に強い《むつかしい》そうだ)。従って、できるだけ静かに過ごすべきだという。

- マヤブー [maja:bu:] (名)「猫の尾」の義。蓄萩^{イダハキ}のこと。原野に自生しており、日常は雑草として利用されることのない植物であるが、お盆の際に、仏前へ食事を供える前に、ミジヌ^ミ・クー [midzinu:ku:] (水の粉)を戸外へはね飛ばすのにのみ用いられる。例、マヤブー・シ ミジヌ^ミ・クー パン^キ・バ [maja:bu:ʃi midzɪnuku: paŋki-ba] (マヤブーで、水の粉をはね飛ばしなさいよ)
- ミー [mi:] (名)巳^ミ。十二支の第六番目。ミーディ・プス [mi:di-pʊsu] (巳年生れの人)。ミーディ・マリ [mi:di-mari] (巳年生れ)。例、ヤーニン^ズナー ミーディ・プスヌ^スルー カー イッケナ^ク カルイ^ヌ アンティ^ダー [ja:nindzuna: mi:di-pʊsunu suru:ka: ʔikkena karuɪnu ʔanti da:] (家族の中で巳年生れの人が揃うと、たいへん嘉例^ミ≪善事≫があるそうだよ)
- ミー^シキ・パナシキヌ^ニ・ニガイ [mi:ʃiki-panaʃikinu-nigai] (「目付き鼻付きの願い」)の義。流行病、風邪の祈願の意。はやり病が流行しないように祈願する神願い。鳩間島では、風邪のことを、パナシキ [panaʃiki] (鼻つき)、ミー^シキ・パナシキ [mi:ʃiki-panaʃiki] (目つき鼻つき)という。これは、風邪の神が人間の目や鼻にとりついて病気を起こさせると信じられているからである。シマッサ^ル [ʃimassarʊ] (鳥くさらしの祭)は、この風邪の神を鳥から追い払うための行事である。
- ミキ [miki] (名)「御酒」の義か。神酒。プール^ミキ [pu:ru-miki] (豊年祭の神酒)は4斗甕に入れて作り、人々に振る舞った。昔は、若い娘たちが、塩で歯をみがき清めた後、一晩水に漬けた白米を噛んで吐き出し、これを石臼で碾いたものに入れて発酵させて作ったという。真白い濁酒でやや酸味があり、アルコール分の弱い酒であった。神行事に供える、クームチ [ku:mutʃi] (供物)の一つである。多飲すると腹が重くなった。
- ミジニー [midzini:] (名)「水の兄」の義。「水の弟」^{ミズノト}(葵)も含めていう。^{ミズノエ}壬。十干の第9日と第10日をいう。例、プー^ルン キチゴンヌ^ン キザ^ル キザロー^メ ミジニーバ^ム トゥ^バ シール^ニ ガイ オー^ル [pu:ruŋ kiʃigonnun kiʒaru kiʒaro: me: midzini:ba mutuba ʃi:ru nigai ʔo:ru] (豊年祭も、結願祭も、祭り祭りは、もう、葵の日をもとにして祈願しておられる)
- ミジヌ^ク・カン [midzinukʌŋ] (名)「水の神」の義。水の神様のこと。井戸や川の水を支配しておられる神様。鳩間島では、アラ^クカー・ウガ^ン [ʔaraka:ʔugʌŋ] (新川御願、御嶽)にミジヌ^ク・カンが祭られているといわれている。例、アラ^クカー・ウガ^ン・ナール^ミジヌ^ク・カン^{マー} オー^{レー}ティル^ミジムトゥ^{ティ} アズ [ʔaraka:ugan-na:ru midzinu-kamma : ʔo:re:ʃiru midzɪmututi ʔadzu] (新川御願に水の神はおられるので水元という)
- ミジヌ^ク・クー [midzinu:ku:] (名)「水の粉」の義か。お盆の三日間や仏前に食事を供える際に、戸外へ向って三回ずつ、はね飛ばすもの。砂糖キビの茎と茄子を賽目に刻んで、そ

れに米と小豆を入れ、昆布の刻んだものを加えて、7回水洗したものを。皿に入れ、マヤーブー（「猫の尾」の義、著萩）の枝ではねる。これは無縁仏たちへの施しと考えられている。これをしないと、無縁仏たちが妬んで、先祖の食事に手をつっこみ、また悪事を働くといわれている。

ミチ・ウタ [mitʃi-uta] (名) お盆の獅子舞いの時、アンガマ隊が移動する際に歌う道歌。

シーシェーマーヌ オールンド（獅子がこられるぞ）アンガマターヌ オールンド（アンガマたちがこられるぞ）パダラヤ ナマシ（鯛は さしみにして）ナマシヤ パイル（刺身には酢を）パイルヤ フナブ（酢には九年母を）オンガキヤ シーソヌパー（刺身の妻には紫蘇の葉）ソーランヤーヌ アッパター（精霊会の祖霊たちよ）ミーザンマーザン オーショーリ（不味でも美味でも召し上って下さい）とうたう。

ミルク [miruku] (名) 弥勒。弥勒神。転じて「弥勒踊」の意に用いられる。布袋の仮面をかぶり、豊年祭と結願祭に踊られる。大きな杖と、大きな団扇を持って、世界報を掬いあげるように使い、神酒を盛ったカンピンを持つ婦人（二人）、五穀の入った籠をもつ婦人（二人）、三角旗を持つ婦人（九人）を従えて、しずしずと巻き踊る。ミルクに扮する男性は、**ウブシケー** [ʔubʃi:ke:]（大城家）の血を引く人に限られている。

ミルクン⁷・ヤー [mirukun-ja:] (名) 「弥勒の家」の義。転じて「弥勒神を祭っている家」の屋号となる。昭和30年代頃までは、**メー⁷ケー** [me:ke:]（大城家の分家でミルク神の仮面を保管し祭っていた家）といわれていた。ミルク⁷ ミルクン⁷・ヤーナ マチ⁷シキティ プ⁷ール ⁷キチゴン ナル ⁷ンザ⁷ソール [miruko: mirukun-ja:na matʃiʃikiti puru kiʃigonaru ʔndzaso:ru]（ミルクは弥勒の家に祭っておいて、豊年祭と結願に出される）。

ムトゥ・サカ⁷サ [mutu-sakasa] (名) 友利お嶽の司。ムトゥ⁷・ウガン [mutu-ugan]（本お願）のサカサ [saka:sa] の意。代々仲底家の血を引く女性の中から、神前で願いをたて、ウク⁷ジ [ʔukudʒi]（「御籤」の義か。神前で祈願のあと、供えてある米粒を組み合わせて神意を占うもの）をバリティ [bariti]（「割って」の義で、ト占しての意）決められた。現在、古老の記憶に残っているムトゥサカサは、大正期に勤められた、ダイケヌ・アッパー [daikenu-ʔappa:]（大工家のおばあさん。大工ヨボシ氏。加治工家の血を引く。子供に恵まれなかったので、後、加治工家の三女を養女に入れた。この人が現在の大工良氏）。昭和初期には、花城家の血を引く、シマフ⁷ケヌ・アッパー [ʃimaʔukenu-ʔappa:]（鳥袋家のおばあさん。加治工家と同様、仲底家に嫁いだ女性と同じ血を引く女性が花城家に嫁した人の血を引くといわれている）。昭和十年代から戦後の昭和30年代終り頃までは、仲底家の血を引く、フク⁷マレーヌ・アッパー [ʔukumare:nu-ʔappa:]（友利家のおばあさん）、昭和40年頃から昭和60年頃までは、加治工家の血を引く、加治工千代氏がその神職にあった。例、ムトゥサカサ⁷ヌ ⁷ヤーナ サカサン⁷ケー アツァ⁷マローリティ カン

ピューール キザルキザルヌ ピューール トウローツタ [mutusakasanu ja:na s̄akasaḡke: ʔatsamaro:r̄iti kampju:ru kidzarukidzarunu pju:ru turo:tt̄a] (本司の家に司の方々がお集まりになって、神日選り<<祭祀の日を選定すること>>、祭り祭り<<各祭祀の>>の日をお取りになられた)。

ムシヌ・ニンガイ [muʃinu-ningai] (名)「虫の願い」の義。カタ [k̄ata] (いなご「蝗虫」)が異状発生して稲の葉を喰い荒らさないように、また鼠が異状繁殖して田や畑を荒らさぬようにと祈願するもの。いなご(害虫)や鼠(有害動物)を捕獲して、小舟を作り、鶏肉や魚等を少量載せて、神前で祈願した後、海に流す。その際、鳩間島は小さな島で、生活できないから、西の方にある大きな国へ行って暮らして下さいと祈願する。例、ウイヌ・ウガン [ʔuinu-ʔugan] (友利お嶽)で、旧暦3月の丙の日に祈願される。ムシヌ・ニンガイヤ マイ スクローランター キサリ ナーヌ [muʃinu-ningaija mai s̄kuro:r̄anta: k̄sarin̄a:nu] (虫の願は、稲を作らないようになったので、切られ<<省略され>>てしまったよ)

ムヌ [munu] (名)「もの」の義。魔もの、悪霊。成仏できずに迷っている霊のこと。異常な死に方をしたり、ソッコ [sokko:] (焼香、法事のこと)をしてくれる人のない死霊。生きた人に憑依して害を加えたり、頼みごとをされると言われている。例、ムヌン マヤーサリン [munun majasariŋ] (ものに迷わされる)。ムヌン ムタリン [munun mutariŋ] (悪霊に持たれる<<操られる>>、悪霊に迷わされる)

ムルムル [murumuru] (名)語源不明。「諸々」の義か。シンザ [ʃindza] (砂糖きび)を7、8寸の長さに切ったものを9~10本ずつ束ね、上下にマキカビ [makikabi] (約1寸ほどの白紙に、8分程の赤紙を貼ったもの)を巻いて、それにフナブ(九年母)、キダヌナル(黒木の実)、バンヌスル(蕃拓榴、グッバ)などを差して飾り、それをサンボー [sambo:] (三方)に乗せ、シトウチヌナル(蘇鉄の実)やカニン(野葡萄)、イーシ(角又)、バサンナル(芭蕉の実、バナナ)、ユブシ(木の実)などをサンボーに盛って飾ったもの。仏壇(トクニ)の左右に1対供えておく。砂糖キビの長いもの(左右に1対)は、グサン [gusan] (杖)と称した。祖霊たちは、1本はグサンにし、他の1本はアイク [ʔaiku] (担ぎ棒)にして、シトゥ [ʃitu] (つと、土産)を担いで帰ると信じられている。アダンの熟した実も1対供えたものである。

ムルムル・ムチ [murumuru-mutʃi] (名)ムルムルと一緒に仏壇に供える円錐状の餅のこと。ピンポン球ほどの餅を約20個ほど盛って、円錐状に作る。仏壇に向って右側に置くのは、やや平たく、左側に置くものは、やや丸みをおびたように作る。例、ムルムル・ムチン スクリ カイキナ ヌーシカザリ [murumuru-mutʃi:n s̄kuri kaikina nu:ʃi kadzari] (ムルムル餅も作って、皿に乗せて供えなさい)

ヤクサ [jakusa] (名)村役人の一つ。スーダイの下で、村行事に従事する人。西村、東か

ら、それぞれ二人ずつ選出され、その年の村行事、神行事一切を、その部下の、ザーアタルや、ジンバイなどと一諸に、彼等を指導しながらとり行なった。神行事に必要な供物の諸準備、後片付けなどは仕事の中でも重要なものであった。ヤク^ツサンケーヤ グサーク^ツマイ ヌンガー^リソ^ツッタ [jakusaŋke:ja gusa:kumai nugga:riso:tta] (ヤクサたちは五勺米の拠出は免除された)。

ヤシキ^ツヌ・カン [jaʃiki^{nu}-kaŋ] (名) 屋敷の神様。屋敷を守護する神様。屋敷の四つ角 (ユーカドゥ [ju:kadu]), ペーラ^ツフチ [pe:ra-Φ^utʃi] (入口、門) には、それぞれ神様がおられると信じられている。特に、フル^ツヌ・カン [Φ^urunu-kaŋ] (便所の神) はマサー^ツン [masa:ŋ] (霊験あらたか) であるといわれている。戸外でヤナ^ツカジ [jana^{ka}dʒi] (「悪風」の義、悪霊) にあたるとき、便所へ行って豚を起こすと、憑き物も落ちるといわれている。

ヤシキ^ツヌ ニン^ツガイ [jaʃiki^{nu} niŋgai] (名) 「屋敷の願い」の義。屋敷を守護しておられる神々に対する祈願。ペーラ^ツフチ (門) の神、ユーカドゥ (四つ角) の神、フル (便所) の神、ナカ^ツバラ (中柱、大黒柱) の神に、ヌーディマリ (何年生れ) のビキジマリ (男、女の場合は、ブナジマリと唱える) の〜 (実名) がフンダメール (踏み固めた) 屋敷内、家内の中に、ヤナカジ (悪風、悪霊) アマリカジ (悪霊) が入らぬようにと祈願する。

ヤマタカ^ツビ [jamatakabi] (名) 「山崇べ」の義か。旧暦二月一日に祈願された。ヤマタカ^ツビ^ツヌ ニン^ツガイ (山崇べの願) ともいう。村人が生活のために山入りをするとき、刃物や毒蛇によって人畜に危害が及ばぬよう祈願するものである。今日では簡略化のため実施されていない。ヤマタカ^ツビ^ツテイ スー^ツ ニガイ^ツヤー マナ^ツマー ナー^ツヌ [jamatakabiti su: niŋaija manama: na:nu] (山崇べという願いは、今はない)

ヤマタカ^ツビ^ツヌ・ニン^ツガイ [jamatakabinu-niŋgai] (名) 「山崇べの願い」の義。単に、ヤマタカ^ツビ [jamatakabi] ともいう。旧暦二月一日に取り行なわれる。虫祓いの祈願や、山に入入りする際に毒蛇による危害が人畜に及ばないように祈願する。ウイヌ^ツ・ウガン [ʔ^uinu-ugaŋ] (「上のお願」の義、友利お嶽のこと) でとり行なわれる。お嶽では蛇のことを、ナー^ツムヌ [na:munu] (長もの) と言ひ、直接的にバブ (蛇) ということを避ける。

ヤマ^ツヌ・カン [jama^{nu}-kaŋ] (名) 「山の神」の義、山の神のこと。山仕事のため、出入りする際に、斧や山刀で怪我をせぬよう、また、ナー^ツムヌ [na:munu] (「長もの」の義、毒蛇のこと。バブ [pabu] ≪蛇≫ということばは、神願いの場では不吉として避けられたという) の害が及ばぬよう、山の神に祈願した。ヤマ^ツヌ・カンニ フチカザルン シ^ツテイ ヤマ^ツー ペー^ツロール [jama^{nu}-kanni Φ^utʃika^{za}run ʃi^{ti} jama: pe:ro:ru] (山の神に口かざりをして、山へ入られる)

ユードウ^ツーシ [ju:du:ʃi] (名) 「夜通し」の義。ツム^ツトゥ [mutu] (友利御嶽) で、サカサヤ

ティジリビー、バキサカサを中心に、村の有志たちが夜を徹して祈願をすること。ユーン
グムル [ju:ngumuru] (夜籠り) をして祈願をすること。ユネンヌ・パイ [junen-nu-
pai] (夕方の拝)、ユナカヌパイ [junakanu-pai] (夜中の拝)、シトゥムティヌ・パイ
[ʃitumutinu-pai] (早朝の拝) の間に神歌が歌われる。

ユーニガイ [junigai] (名)「世願い」の義。旧暦3月のミジニー [midzini:] (壬) の日を選
んでとり行なわれる祭祀。友利御嶽で祈願をし、ニシドーウガン (西堂お嶽)、アラ
カー・ウガン (新川御嶽)、ピナイノ・ウガン (鬚川お嶽)、マイドゥムル・ウガン
[maidumuru-ugan] (前泊お嶽)、ミルクンノヤー [mirukun-ja:] (彌勒を祭っている家)
の順に、サカサ、ティジリビが回って祈願をする祭祀。ニンガチニンノガイ [niggatji-
ningai] (二月願い) で祈願した。①ゾーシキノ・ニンノガイ、②アラカラジヌ・ニン
ノガイ、③イニアノ・ニンノガイ、④アミンノガイ、⑤マミノニガイ、⑥ミーノシキパ
ナシキヌ・ニガイ、⑦マイヌノ・ッサバーノニガイ等の総括的な祈願をする。最近では人口
激減のため、ニンガチニンノガイはかなり省略され、ユーニガイでまとめて祈願されるよ
うになったといわれている。ユーニガイヤノ フカノ ニンノガイ キサノソーラバン キ
サランノティ シー マナーノキン シーオーノルンティ ゲラ [junigaija ɸɸkanu
ningai kʲsaso:rabaŋ kʲsaran-ti ʃi: manama:kin ʃi:orunti gera] (世願いは、他の祈
願が切られても≪省略されても≫切られないと言って、今までも実施しておられるさ)

ユー・シギルン [ju:ʃigirun] (動)「世過ぎる」の義か。「死亡する」の意、普通、目上の
人に対していう。「死ぬ」の敬語。ユー・シギロールン [ju:ʃigiro:run] (お亡くなりにな
る)。ユー・シギローラヌ [ju:ʃigiro:ranu] (お亡くなりにならない)、ユーシギロー
リティ [ju:ʃigiro:riti] (お亡くなりになって)。例、ウヤヌ ユーシギローリ ナーヌ
[ʔujanu ju:ʃigiro:ri nanu] (親がお亡くなりになってしまった)

ユーチング [jurtʃingu] (名)「四つ組」の義。料理用語で、ご飯、汁、揚げもの、煮ものの
四種類を組み合わせた料理のこと。島では、ユーチングの持て成しを受けることは、正月
とお盆などの祭祀、行事のときとか、祝儀のときに限られていた。例、サクシッフアノ
タンカーヨイティ シー ユー チング スクローッタ [sakuʃi-ffanu taŋka:joi-
ti ʃi: jurtʃingu sʲkuro:tta] (嫡子の子の誕生祝いといって、四つ組料理を作られた)。

ユヌノレー [junure:] (名)一周忌。人の死後、翌年の同月同日にとり行われる法事。タン
カー・ソッコ [taŋka:sokko:] ともいう。タンカーには、「1年目」、「一対一で対峙す
ること」、「一直線に向きあうこと」の意があることから、「一周忌」の意に用いられたの
であろう。ユヌノレーの語源は不明。例、タンカーソッコバルノ ユヌノレーティ アズ
[taŋka:sokko:baru junure:ti ʔadzu] (一周忌を、ユヌレーという)。

ユーノレー [ju:re:] (名)幽霊。死者の霊がある形をとって人間界に現われるもの。死者の
魂。浮遊して歩くといわれている。ユーノレーが出現するのは、それが成仏できずにさ

迷っているので、人に何かを頼むためだと言われている。例、ユーレー^ユヤー ヨー^ヨ タ
ナミグト^ナ ヲ^ヲ アレー^ア テイル ン^ン ジ^ジ ル^ル ティ^{ティ} ダー [ju:re:ja jo: tanamigutunu
ʔare:tiru ʔndʒirutida:] (幽霊はねえ、頼みごとがあって出現するんだそうだよ)。

ユナカ^ユヌ・パイ [junakanu-pai] (名)「夜中の拜」の義。豊年祭のユード^ユウ^ウ シ^シの夜中に、
友利御嶽のウブ^ウ ヤー [ʔubu:ja:] (大家) でとり行われる祈願のこと。サカサは麻製の白
衣裳を羽織るように着、ティジリ^{ティ} ビ^ビは麻製のクンジ^ク キン [kundʒikij] (紺地着物) にカ
ク^カ フ^フ ビ^ビ [kaku ʔukubi] (角帯) をしめて祈願する。午前零時頃に行われる祈願 (拜)
のこと。

ユネ^ユヌ・パイ [junennu-pai] (名)「夜の拜」の義。夜の8時頃に行なう祈願。プー^プル
(豊年祭) の、ユード^ユウ^ウ シ^シ [ju:du:ʃi] (夜通し、夜を徹して祈願する祭式) の夜に行
われる。友利御嶽のウブ^ウ ヤー [ʔubu:ja:] で、サカサ、ティジリ^{ティ} ビ^ビ、バキサカサ、それに
村の有志の方々が集まって、祈願の合間、合間に歌舞をして、夜を徹して祈願をする。そ
の最初の祈願。

リュ^リーグ^グー^ウヌ・カン [rju:gu:nu-kan] (名)「龍宮の神」の義。水神、海神のこと。例、ス
ナ^ス カ^カ ナ^ナ ミ^ミー^ウ ヲ^ヲ ティ^{ティ} シ^シ ュ^ユー^ウ プ^プ ソ^ソー^ウ リ^リ ュ^ユー^ウ グ^グー^ウ ヲ^ヲ ヲ^ヲ ナ^ナー^ウ ニ^ニ ツ^ツ サ^サ リ^リ
ティ^{ティ} ジ^ジー^ウ ヲ^ヲ ギ^ギ ソ^ソー^ウ ヲ^ヲ タ^タ [sunakana mizuti je: pu:so: rju:gu:nu kan-na:ni
ssariti dʒi:nugi so:otta] (海で死んだ人は、龍宮の神様にその旨を申し上げて、ジ^ジー^ウ
ギ^ギの祈願をなされた)

ン^ンカイ^{カイ}カ^カジ^ジ [ʔɣkai-kadʒi] (名)「向かい風」の義。悪霊と行き合うこと。目には定かに見え
ないが、生暖かい風が吹いて、身の毛がよだち、意識を失い、方向感覚を失ってさ迷い歩
くという。そういう行動を起こさせる風、悪霊。ヤ^ヤ ナ^ナ カ^カ ジ^ジ [janakadʒi] (悪い風、悪霊)
ともいう。例、ン^ンカイ^{カイ}カ^カジ^ジ ヲ^ヲ ウ^ウ ソ^ソー^ウ リ^リ ティ^{ティ} ヲ^ヲ マ^マ ヤ^ヤー^ウ サ^サ ヲ^ヲ リ^リ ア^アー^ウ ク^ク ヲ^ヲ タ^タ [ʔɣkaikadʒin
ʔusoriti maja:sari ʔa:kuta] (向かい風<<悪霊>>に襲われて迷わされていた)

ン^ンカイ^{カイ}・ズ^ズー^ウシ^シ [ʔɣkai-dzu:ʃi] (名)「迎え雑炊」の義。お盆の初日の夕方、祖霊を迎えて
供えるために作るお強の雑炊。豚肉や魚肉、カマボコなどを賽目状に切って、醤油で味付
けして炊きこんだ雑炊。五目飯に似て美味である。例、ウ^ウ ヤ^ヤ プ^プ ス^ス ヲ^ヲ ン^ン カ^カ イ^イ ズ^ズー^ウ
シ^シ シ^シ キ^キ マ^マ チ^チ ヲ^ヲ バ^バ [ʔujapʊsum mai ʔɣkaidzu:ʃi ʃikimatʃiba] (ご先祖様の前に、迎
え雑炊を供えなさいよ)

ン^ンカイ^{カイ}・ビ^ビー [ʔɣkai-bi:] (名)「迎え日」の義。ソ^ソー^ウ ラ^ラ ン [so:ran] (精霊会、お盆) の第
一日。旧暦7月13日のこと。朝から祖霊を迎えるために仏壇や位牌を洗ったり、拭いたり
して準備をする。ムルムルを供えたりして、すっかり仏壇を飾り終わると、祖先の霊を迎
えるために、門の脇(西側)に稲藁1束の穂先の部分を丸めて結え、その中に燻を入れて
煙をたてる。祖霊たちは、この煙に乗って各家に降りてくるといわれている。

ン^ンマ^マ [ʔmma] (名) 午^ツ。十二支の第七番目。ン^ンマ^マ デ^デ イ^イ・プ^プ ス [ʔmmadi-pusu] (午年生れの

人)、ンマ¹ディ・マリ [²m̄madi-mari] (午年生れ)、ンマヌ¹・パー [²m̄manu-pa:] (午の方向。南の方) 例、ウレー¹ ンマ¹ディ・プス ヤレーティ¹ル¹ アイニ¹ ピヤーンカ¹ ピヤーンカ¹シパニッケー¹レティ¹ アーク¹ク [²ure: ²m̄madipysu ja:retiru ²aini pja:ŋka pja:ŋkafi panikkerreti ²a:l̄cuku] (そいつは、午年生れだから、あんなにピョンコピョンコとはねまわってあるくんだろうよ)